



84  
221

世界歴史譚  
第六編

麻訶末目次

第一	亞刺比亞國	三
第二	市人麻訶末	九
第三	ヘウの洞窟	三
第四	默加之豫言者	三
第五	豫言者の市	四
第六	アブソファン	三
第七	教國	六
第八	入滅	七
第九	神蹟	一七
第十	人ご教	二七



79W19136



目次終

世界歴史譚 麻 詞 末

文學士 坂本 蠡舟 著

北 蓮藏 畫

緒言

觀來れば古來幾多の英傑が龍拏虎擲の偉蹟は空く竹帛の煙  
 ご銷して依然たる山河の舊形勢徒に征人行旅が弔往の涙を濺  
 がしめざるは稀なり而も尙詩人は歌ふて曰く英雄回首則神仙  
 ご神たらず仙たらず聖賢たらざるもなほ人間の英雄ごして不  
 朽の名は千載の下に傳ふ可し況や徳化を人間に布き神業を靈  
 界に建てし神仙の道賢聖の教に至りては寔に萬古滅せざるも

末 詞 麻



のあり然らば彼左手に捧げたる經典には天神の福音を傳へて  
 一宗の教祖と仰がれ、右手に提げし利劍もて攻伐の偉業を成し  
 て百戦の英傑と稱せられし麻訶末の如き豈稀代の偉人ならず  
 や宜なり、千三百年前大漠を踏破せしアル、カスワ(麻訶末の駱駝)  
 背上の人は今空きも、千三百年後綠色濃きサンヂキ、セリフ(麻訶  
 末の旗)は尙コンスタンナノールのモスクに飜れり、嗚呼數頭  
 の駱駝を宰して朝に默加城門を出て夕に砂場の月に宿りし一  
 少年を見て、他年教を説く半面の祖師劍に杖る半面の英雄を豫  
 知せしもの抑誰かある、吾人は假令天使人間に降るアル、カデル  
 の神聖なる夜神誥を傳ふるガブリエールが美妙の聲を聞くを得  
 ざるも、豈古往今來比倫渺き偉人として阿刺比亞の豫言者回々  
 教祖麻訶末の歴史を讀まざらむや。

第一 亞刺比亞國

抑天が偉人麻訶末を降し、は何の地ぞ、試に輿地の圖を展へ  
 て、眼を亞細亞大陸の西南隅に注げば、波斯灣を隔て、東は波斯  
 に對し、紅海を挾むで西は埃及、エシオピアと相望み、北の方エウ  
 フラテスのベレスより、波斯灣頭のバスラと紅海北端のスエズ  
 この正中を貫きて直に正南に下ること、大約六百里にして、乳香  
 の薰も高く聞えたるバブ、エル、マンデブの海峡に臻り、海峡を稍  
 斜に東南に向ひ、印度洋に沿ふて奔ること、大約四百里を國の南  
 涯となせる、廼然たる一大半嶋を見む、亞刺比亞國是なり。  
 然れども半嶋の大部分は荒涼たる漠域にして、晝間は沙漠際  
 涯なき、黃砂を照らす烈日の光眩く、熱金を鑠かし、夜間は瑠璃色



美しき穹窿に懸かる星斗の影牙へたり、若し夫瘴風一たび起れば幾隊の人馬悉く砂底に葬られて不祀の鬼となる、禿山兀嶺雲表に屹立するも林樹莫く薪材乏くして火は永劫の久きを崇ばれ、暑天熱地遠くつらなりて雨水少く池沼稀にして水に天漿の値あり、唯時に綠陰清泉の美地其間を點綴するありて、異木香艸を生じ椰子棗菓を産し、民衆こゝに集りて農耕に工藝に其業を務め稍聚落市邑を爲せども、多くは漠域を隔つるを以て互に異郷の想を爲し、チツドの大砂漠によりて別たれたる波斯灣頭のオマン、パレインと紅海沿岸の羸滿王國との如きは當時に在りては實に殆ど殊域別國の感ありしならむ幸にして荒野を馳騁するに汗血の天馬あり、大漠を渡るに駱駝の舟あるを以て、四方に來往するを得しも、若し昊天此二獸を與へざりせば亞刺比亞

の民は遂に一國を成し能はざりけむ而して此荒涼不毛なる半島の民は、半は水草を逐ふて移り羊を飼ひ馬を畜ふ游牧の人半は是邑を成し市を造り四方に來往する隊商の徒なり、雖も此の如き天然と此の如き地理とは渠等をして沈思緘黙多く言はず、言へば則懸河の辯あり、堅忍久耐稀に發し、發すれば則快手敏腕當る可からざるの民たらしめぬ、その婦人主として家事を宰り、男兒はつねに馬背に跨り、弓を彎き槍を投じ、偃月の劍を舞して武をエミルの旗下に練り、其勇名四隣を畏服せしめ、落々磊々たる不羈縱横の性毫も外敵を恐れず、堂々陣に臨みて必勝を期す、若し不幸にして敗るれば汗血に風を逐はせて遠く漠中に遁れ去るを以て、敵者遂に其踪跡を失ふて已む、且渠等が邑落都市を成すやシエイクありエミル長共の義あるも唯その辯力智勇統



率の便なるによりて其位に在るに過ぎず、家門族閥の抜き難き情誼あるに非ざれば、若敗徳失行あれば衆皆之を攻め之に代る可し。故にエマンの如きは稍王國の體をなせるも、其他都邑の治は殆ど後の所謂民主政の實を有し其民皆四方の志を懷き征旅を以て家ごなし常に自不征國の自由の民を以て誇れり。たゞ自由にして強武なる弊や、剽畧奪掠の風を生じ、牧者も商賈も農工の儋も他の半面は一種の寇盜にして、或は百千隊を編み黨を結び屢征人行旅を窘め引て殺戮復讐の悪俗となり、動もすれば則干戈を把りて相争ふに至れり。然りと雖も商工業の發達と文化の進歩は漸く此殺伐偏狹の俗を化して勇武にして寛忍なる美風となし、假令仇敵といへども己を信じて來り投ずる者あれば、厚遇款待殆ど至らざるなく、其辭し去るに臨みても亦懇に之を

閭門に送り而して後力能ふ可くんば始めて之と闘ふ、未だ嘗て他の困厄不利に乗じて己の利を圖るの怯を爲さざるなり。渺漠たる平砂幾百里行きく、て夜を申ね仰て辰宿の列張を觀て行路を誌し、亞刺比亞人は、他の上世の民と同じく恒常不變の光耀を放てる天上の星斗を拜して神ごなしたりしも、而も麻譚末出世の時に方りて全亞刺比亞の崇敬したるは、唯一の默加の方石殿なりき傳へ云ふ、往昔阿當が第七天を逐はれしの日、初て降りて神室を作りし靈跡なりと、則其地に天降の一黒石あるを以て、天國より墜下せし神石なりとなし、其傍に一清泉の湧出せるを發見して、ゼゼの聖泉と名け、跡を神仙に托して參拜の靈場となし、かば四方傳へ聞きて詣賽する者多く、爲に一毫の天利なく、地便なき僻陬の一寒地はいつしかに熱鬧繁盛なる默



加の市街を化し、神石聖泉の上に高七間、四面六間内外の方石殿を造營して其形によりてカアバの壁と呼び、壁外更に柵を繞らし、て冒瀆を戒め、外に花燈を懸けつらねて星辰に擬し、内に三百六十体の神像を安置して威靈を仰けり。

斯りしかば荒砂涼漠の間に散在して異郷殊域の感ある諸邑落に據りて互に相爭奪攻伐せし亞刺比亞の諸部族も、年の暮毎に神を拜し利を射んが爲に此地に集ひ來つ。默加の市民は或はゲダより紅海を渡りてアビシニアに通商し、亞非利加の珍貨異物を載せてかへり、或は大漠を亘りて東の方パールレインのカナフに赴き、波斯灣底の眞珠を獲て海に浮びてエウフラテスに向ひ冬は南方エーマンに入り夏は北方志利亞に出て、薰材香料をサアナ、メラブの市場、オマン、アデンの港口に求め、穀物器財をダ

マスクス、ポストラの諸都に購ひ、默加は四通八達の要衝として、東西南北の互市場となり、人口一時は十萬に上りたり、而も駱駝を牽きて東西に徂來する隊商、蒲樟を驅りて南北に出没する寇盜の外に、沙漠たる大半島また世の視聽を驚かすに足るものなく、皎月徒に黃砂を照らす幾百星霜を経て、亞刺比亞の地既に荒れ、亞刺比亞の天將に老ひんごす。此時に方り此天一明星を此地に降し、亞刺比亞の靈界を照らす大光明は方石殿の靈域默加市中より起れり、回々教祖麻譚末の出世是なり。

第二 市人麻譚末

世に傳ふ、麻譚末は賤民卑族の胤なり、而も是異教の徒が回々教祖の名を傷けんが爲の讒構誣言のみ、或は謂ふ、渠はイシマ



エルの裔なりと、是亦尊崇の輩が其門地を貴くせんとの諛言に過ぎず古より稱す王侯將相寧種なしと、偉人は自偉人たり胡爲ぞ故意に其祖を神にし其門を尊くするを用ひんや若し假に其先を論ぜば偉人の偉を爲す所以は寧ろ遠祖にあらずして却つて近く父祖の上に在り而して麻譚末が父祖は實に默加の名門として、歴世方石殿の守護職として、名高きコレイシ族に出でたり。

コレイシ族のハンシュムの子にアブド、アル、モターレブあり富豪にして善く財を散じて窮乏を賑し、又嘗てアビシニアの寇を防ぎて默加を救ひたり、斯りしかば天慶祥を此積善の家に降し、モターレブは天壽を享くること實に一百十歳花に肖たる六個の女兒と玉の如き十三個の男子を挙げぬ中に就きて最その鍾愛

を受けしアブダウは、秋水を神とし玉を骨と做し、美男の譽亞刺比亞國中に高くして、一名門の貴妹エミナを娶りて妻となすや、天下の處女の羨怨して恨死せしもの二百個に上りきこそ。エミナ既にモターレブの子、アブダラに嫁ぎ、一夜身大光明を放ちてポストラの宮殿を照らすと夢み、遂に一男兒を生む、舅モターレブ神瑞を聞きて狂喜措かず、頌讚の義をこりて兒に名を麻譚末と命ず、實に麻譚末曆年の第三月第十レビイの第一日にして、基督紀元五百七十一年十一月十日、或は五百六十九年、或は五百七十年、或は五百七十一、或は五百七十二年に當れり。在りては陳の宣帝の大建三年に當れり。偉人の出づるや必ず靈異の事蹟を附會假托して其人を神にせんとするは上代の俗にして殊に一宗一教の開祖に至りては







後世信仰の徒迹を神靈に托して其尊威を加へんとする切なるを以て、荒唐奇異不可思議の傳説太多し傳へいふ麻譚末の生るゝや光輪身邊を圍繞し異光室に満ちて遍く國中を照らしたりと又曰く、此時百兒士亞王ユスロエスの王宮震動して十四樓臺これが爲に仆れ、一千年來不滅の靈火忽焉こして滅し、世界の偶像皆斃れ、サワの湖一朝に涸れて、ナグリスの水大に溢れたり。殊に、その生るゝや直に跪きて雙手昊天を指し「天神偉なる哉、宇宙唯一神あるのみ、余はその豫言者たり」と道破せり。と曰ふに至りては、何ぞ大聖釋迦の生後直に天上天下唯我獨尊と絶叫せしといへるゝ相似たるの酷しきや。

麻譚末生れて僅に二月にして父アブダラは不歸の客となりしにぞ母エミナは悲哀慟哭の餘乳汁枯れて幼児を養ふこと能

はず歳毎に默加に來往するベドウィンの牧人の妻ハレマに托して育せしむ。ハレマ麻譚末を預りて默加を去るに及び、麻譚末騎るごころの驢馬途上人語を發して「我は大豫言者を乗せたり、我背上の兒は天神の使徒なり」と曰ひ、羊群路傍に聚り拜し、宙天の太陰も亦禮をなせしごと。

斯くてハレマの許に養育られし麻譚末は生後僅に三月にして能く立ち、七月にして能く奔り、十月にして弓矢を弄びて群童と嬉戯せり。居ること三年、一日ハレマの子マスラウドと共に出で、野外に遊びしに、二個の白衣人あり、來りて麻譚末を捕へて地上に踏し、利刀を以て其胸腔を剖き、其心を洗滌して去る。マスラウド大に驚き、馳せて家に歸り、備に其事を母に訴ふ。ハレマ聽きて、白衣人は是惡魔にして麻譚末は爲に魅せられしと想ひ、大



に怖れて不祥ごなし、直に之をエミナの許へ送りかへしぬ。蓋し天使降下して教祖胸裡の一切の罪障悪念を除却したるなり。こ、回々教徒は解きてまた教祖の神靈を誇る一話ご做せり。夙く父を失ひ今また乳母に厭はれし此幼兒は母の手に歸りしも僅に六歳にしてまた母に訣れしにぞ、此時既に百歳を超えたる類齡老殘の祖父アブド、アル、モターレブは之を撫育し失せにしアブダラが再度現世に蘇生りたらん様に簪の花掌の珠ご愛でいつくしみけるが、是さへはつかに二年にして冥界の客ごなり果てつ、茲に麻訶末はまこと頼む方なき孤兒ごなりて、諸叔が強忍にしてハシム家の遺産を争ひ頒つ間に、漸く五頭の駱駝ご一女婢ごを得て、身を叔父アブ、ダレブによせぬ。

椰子實り棗子落ちて過ぐる光陰に關守なく、麻訶末年紀既に

に十三歳になりしかば、はじめで商隊の夥に加はりて志利亞に赴き、翌くる年は十四歳の春を迎へ、其一族に伴ひて軍旅に従ひぬ。此の際チストリア派の一高僧と旅宿を同うせしことありて、後の萬朶の法の華は早く此日に其種子を幼き人の胸臆に播きそめたらむといふ者あれど、外國語に通ぜざりし麻訶末は、抑何をか得たりけむ之を要するにそが十餘歳の少年時代より二十五歳の曉まで此未來の豫言者はいかなる生立を遂げむ、知るに由なきも想ふに駱駝を宰して漠中の行商ごなり、牙籌をこりて市場の賈客たりしならむ。

時に賈人クシマなる者ありて麻訶末ご善し、その叔母カヂエが巨萬の資を擁して新に夫に訣れたるに遭ひ、麻訶末を薦めて其家事を理め商業を助けしむ。麻訶末叔父アブ、ダレブに諮りて





其允許を得遂にカヂエの家に事へ屢出でし四方に行商す。一日カヂエ侍婢を従へ城門に頼りて麻罽末の歸るを望み見るに怪む可し一團の雲氣空を掩ひ恰も兩個の天





使神翼を張りて麻訶末の爲に烈日の光を遮るものゝ如し。仍りて大に之を異とし侍婢を顧みて曰く「是天神の冥助ある偉人ならざらむや」と意頗る動く。カヂエの奴にマイサラあり、麻訶末を見て説きて曰く「卿胡爲ぞ娶らざる。曰く「我に恒産なし何の暇ありて欺敢て姻事を議せむ。」「マイサラ更に曰く「然らば若し富貴の婦人ありて卿が容儀の典雅と門地の尊貴を望みて婚を求めば如何。曰く「其婦人は誰ぞ。」「マイサラ曰く「吾儕が主婦カヂエなり。」「麻訶末驚きて曰く「如何ぞ成らむ。」「マイサラ曰く「我誓て之を成さむ」と而して果然カヂエの父は麻訶末が赤貧洗ふが如きを見て心太だ喜ばず獨りカヂエは深く其人物の端正と其天性の勤勉を愛せしかば、結婚の議は遂に決し、アブ、メレブは黄金十二オンス、駱駝二十頭を贈りて阿姪が入贅の資となし、カヂエが從兄

ワラカ、ビン、ナウフルも其間に周旋の勞をこり、麻訶末は門前に駱駝を屠りて貧者を賑はし、戸を開きて浴く來り會する者を饗せしかば、彼のペドゥ井ンの牧人の妻ハレマも斯く傳へ聞きて來り賀す。麻訶末大に喜び羊四十頭を贈りて幼時乳養の恩に酬ひたりき。

斯くの如くにして青春方に二十八歳の容儀端正なる新夫と、なほ殘艶餘香を留むるものからはや四十路の坂を超へそめし老婦は、茲に偕老共棲を契りて、夫々婦々の情いと濃かに、家庭和樂の夢穩なる裏に、男女幾個の子女を挙げ、すぎゆきすぎ去る十餘年の星霜早くも移りて、市井の塵に埋もれし半生の往蹟幻に似て年齢既に四旬に達し老將に至らん。す噫、四十年は夢幻の如く、麻訶末の名は默加の一市人と共に老ひて長へに大漠の裡



に葬られて永く世に知られざらんごしき誰か料らむ一朝天地の神秘に觸れて靈臺一點の火は十方遍照の大光明となり市人麻譚末は一飛躍して天神の福音を宣傳する大豫言者となりんごは看よへうの洞窟に大信仰を立てし大豫言者を。

第三 へうの洞窟

此時に當り四隣の邦土は皆英雄豪傑の馬蹄に蹂躪せられて其羈絆の下に屈せしかば諸邦の民各所信を説き所説を行はむため四方より亞刺比亞に入り來り紅海の東波斯灣の西にはサバ、マシ、猶太、基督等諸宗諸派の教法並び行はれたりきかの源をカルデアの學術に發しアンリアの四征によりて弘通流布せし拜星教は巴比倫の學者が二千年來天文學上に得來りし恒常不

變の自然法を僧徒が教法に附會して七星七曜十二帶二十四宿の神を祀り常にハランの月宮殿に賽せしに其徒バストラ地方に入るに及びて忽地多神教の殘壘を捨てて聖汝の基督教に趨り投じ巴比倫の祭壇はマシ教の聖師に毀たれしも阿歷山大王の東方を征略せし後五百年間百兒士亞は外敵に屈し拜火教の神髓も亦其地を去りて此漠域に移り遁れぬ而して猶太人は麻譚末の前七百年早く既に亞刺比亞に入りしが羅馬のナツス、アドリアン兩帝が東方を經略するに及び猶太教徒の東南に奔りて此國に入るものいよく多く所在に猶太教會を設けて異教の徒外道の士を教化し羅馬加特力派の昌隆を來すや其抑壓を受けし諸基督派は皆帝國以外に遁れ諾斯士の一派なるマルキオン派、マシ基督兩教を併せしマニ教の輩、ヤコブ、チスト、リウスの



衣鉢をつけるもの、何も熱血を絞りにて弘教に盡くし、基督の教は  
 エマンの寺院、ピラ、カザンの後宮に説かれぬ。是に於てか天地唯  
 一神のあるありて、天使に憑り豫言者に因りて福音の人間に傳  
 はるものなり。こいへる一神教の根本思想は、是等の外教徒によ  
 りて宣傳せられ、聖師、哲學者の嵩遠幽玄なる教旨は、亞刺比亞固  
 有の疎雜なる偶像信仰と混じ來つ、意志行動共に不羈自由なる  
 國民が、なほ方石殿の神靈を崇拜せる間に、諸異教諸外道は、八方  
 より之を説服教化せん。と争へり。思ひきや、此紛糾錯綜せる諸宗  
 諸派の中に、一道の靈光蒼天より下りて、花もなく香もなき荒涼  
 なる漠中に、新しく奇しき教の林しけり。法の華亂れ咲かむ。こは、  
 史に傳ふる所によれば、麻訶末は風丰典雅にして、舉止公明博  
 聞強記にして、縱横の辯を有し、大才機智ありて、所斷最明快事に

當りては勇往直進、毫も轉退せず、能く初志を徹貫して、而る後は  
 じめて已む。故に其勢の盛なるに方りては、殆んど當る可からざ  
 るも、尙よく權門勢家に屈し、且ふかく孤獨貧弱を愍みしかば、頗  
 る交友の間に、重んぜられき。たゞそれ當時の亞刺比亞は、漸く文  
 字の使用ありし程にて、一般の文運未だ甚開けざれば、幼にして  
 父母を失ひ、叔父の援によりて、漸く商家の人となりし。麻訶末の  
 如きは不幸にして、書を讀み字を寫すことを解せず。従つて讀書  
 によりて、前賢先哲の遺業を知る能はず。年毎に默加の方石殿へ  
 集ひ來る諸方の巡拜者が、談話によりて、各地方政治の得失、風俗  
 の隆汚、さては猶太、基督、其他の諸宗教の旨義、典禮など、聞き知る  
 便はなきにあらねど、隣れる志利亞の國語すらよくせぬ。麻訶末  
 が、これによりて、智能の上に加へ得たるところは、想ふに量り知



る可きのみ然りと雖も英雄豈悉く讀書の人ならむや、瀏項元來書を解せず十三叔父に従ひて隊商の群に入り、二十八カヂエと婚して買家の主となりし麻譚末は論ずる所は政治にあらず宗教にあらずして利益損失のみ、訪ふところは君王の庭にあらず將帥の陣にあらずはた神聖の廟にあらずボストラ、ゲマスキスの定期互市場に過ぎざりしかど、天才の視聽するところは自凡庸に異なり、幼時より緘黙を守り沈思に耽りし渠は征旅の間常に意を諸國の盛衰に注ぎ、想を諸教の隆汚に潜め、目親く睹るころ江山の偉圖を披き、身親く接するころ人間の眞書を繙き、直に自己が熱血を注ぎて徐に其大理想を養ひたりき。談論交友は智能の上にて得るころ多きも、幽立の想を練り崇高の神を養ふには閑寂の境を求めざる可からず、黙加を距るこ

こ里餘にしてへウ山に一洞窟ありしかば、麻譚末は年毎にラマダンの月(麻譚末曆の)第九月を期して家を出で此洞窟に籠り盡く塵世の交を絶ち、獨り靈界の光を求めんご力めぬ。想へば希臘の諸哲も猶太の神傳も亞刺比亞の教義も解き得ざりしは宇宙の大謎語なりき物によりて物を觀れば象形の外に出づること能はず、悉く象形を離れて直に天地の眞諦に觸れんとする身には、エラリクウスの帝冠も、ユスロエスの玉座も望むところにあらず、誰か一黙加のシェイク、一亞刺比亞の主權を以て其目的に應へ得べしとせんや、我は何天地は何生死は何ぞ、抑何をか信じ何をか行ふ可き之をシナイの山に問ひしが如く、今又へウの洞窟に問へご地は黙して答へず、仰て之を蒼空に問へご天は眠りて應ぜず、天地既に應へずして唯こゝに我一心あ





るのみ。麻訶末沈思冥想幾夜の後遂にアルカデルの夜は来りぬ。



天眠り地死し万象寂然として萬籟なきころ轉然として大



頓悟を爲せば、光明忽焉へウ山中に盈ちて、天上の神使ガブリエ  
 ル天神の聖意を齎らして降り、空際美妙の聲高く「讀め、我は讀  
 むこと能はず」と麻哥末の答ふれば、天上再び聲ありて曰く「讀め、  
 造化の神の御名によりて讀め、人を造りし天神の御名によりて  
 讀め、親ら筆を執りて知らざるころを人間に教示し玉ふ大慈  
 悲神によりて讀め」と麻哥末之を聽きて山中に進めば、都麻哥末、  
 爾は天神の使徒、我は其天使なり」と云ひてガブリエル顯れぬ斯  
 くて麻哥末は「宇宙唯一神あり、我は其神の使徒なり」と宣言し、イ  
 スラム神意の服従の大神仰を立て、天來の神書アル、コーランを懐き  
 てへウの洞窟を出てたり。  
 此時に至り亞刺比亞の偶像教はもこより論ずるに足らず、拜  
 星教もマシ派も不知不識の間に偶像崇拜に近似し來れる基督

教も新にへウ山中に唯一天神を認識せし默加の豫言者麻哥末  
 の眼底には皆悉く異端外道と映じぬ、出づれば没し、生ずれば滅  
 し、壞亂腐蝕する者は癡絶盡滅を免れず、この眞諦を立て、渠は  
 他の偶像を拜し、偉人を崇び、星宿を祀る諸教を排斥し、表れたる  
 形なく居る處なく所出なく肖類なく唯人間の最大秘想に現じ  
 萬能具足常住不滅なる宇宙の唯一天神を拜すべしと説き、阿當  
 よりノア、アブラハム、モーゼルを経て基督に至る古哲先聖を悉  
 く自己の先達となし、メリーの子耶蘇基督は寔に神の使なり、彼  
 十字架上に磔殺されしものは一個の幻影なりしと、一個の罪囚  
 たりしことを問ふ勿れ、無垢清淨の聖神は早く既に第七天に昇り  
 去り、自來星霜を経ること、こゝに六百餘年今やその教徒は擅に  
 教祖の遺法を殘却し、神聖を冒瀆するを以て、こゝに諾斯士の教



によりて猶太基督兩教徒が聖典の本義を破るの非を鳴らし、最  
後に出で、最大なる神使麻訶末が新に聖神の靈約を人間に宣  
傳するものなりと呼號せり。時に麻訶末の年紀方に四十歳にて、  
基督紀元六百十年、皇朝の推古天皇十八年、支那にては隋の煬帝  
の大業六年に當り、回々教の始源實に此處に起りぬ。

第四 默加の豫言者

麻訶末既にヘウの洞窟を出で、家に歸り、妻カヂエを見て、備  
に靈異の蹟を告げて天使ガブリール我を以て天神の使徒、人間  
の豫言者となせり。云へば、カヂエ大に喜び、直に去りて之を從  
兄ワラカ、ビン、ナウフルに告ぐ。ワラカは夙に猶太基督兩教の經  
典に精通せる篤學博識の士にして、つねに偶像崇拜を非議せし

かば、之を聽きて曰く、昔者アムラムの子モーゼス豫言者の出世  
を千歳の上に説けり、されば麻訶末こそ疑もなく其豫言者なれ  
ど、カヂエ還りて之を夫に告げしかば、麻訶末やがて祈禱をこら  
し行きて七たび方石殿を廻りてかへりぬ。是に於てカヂエは先  
づ麻訶末の教に歸依せり。アル、サヒーに麻訶末が言を傳へて  
曰く、男子の徳全きものや多し、婦人に至りては唯四個あるのみ、  
アラオの妃アシア、アムラムの女メリー、コワレドの女カヂエ、麻  
訶末の女フナマ是なりと。  
次で麻訶末の從弟アリ、豫言者の弟子となり、家奴ゼイドは羈縛  
を解かれて狂喜して新教に歸服し、遂に巨萬の富を擁せる濃厚  
老實の君子アブケールがイスラムを奉ずるに至り、新興教法  
の第一基礎成り、其勧誘によりてオトマン、アブダル、ライマン、サード、



ズベイル、テルハ、アブ、オベイダ等默加第一流の市民十個は豫言  
 者が秘密説法に耳を傾け、皆一齊に天地唯一神ありて麻譚末は  
 其使徒なりといへる根本信條を唱道して教徒となりぬ。而して  
 渠等が信神の利益は顯著しく、早くも現世に應報ありて、出で  
 は萬軍の將帥となり入りては王國の政機に參與し、富貴榮達を  
 眼前に見るに至りき。而してゼイド放釋の先蹤を追ひて爾後奴  
 婢の其教に歸依する者は悉く赦して皆自由の身となりたり。  
 かく宣教の劈頭に麻譚末は十四個の教徒を得てしかば密に  
 此等の徒を集めて法を説き教を垂るゝものから、其後次でイス  
 ラムに歸するものは一個もなく、歳華流水の如く三年の光陰  
 夢と過ぎて早くも宣教第四年となりぬ。麻譚末よりてまづ其同  
 族より教化せんご、默加に近きサフの丘上にハシム家の姻親縁

族を會し、將にその新興の教旨を説かんごするや、最強頑なる叔  
 父アブラハブ憤然蹶起し衆を煽動し、石塊を投じて説教を遮げ  
 んごして會衆皆喧囂をきはめ、宣教の企圖は一敗地に塗れぬ。し  
 かも麻譚末は斯る小頓挫を以て屈する者にあらざれば、翌日更  
 にアリに命じて卓を配し案を排し、羊を屠り乳汁を絞り、盛宴  
 を自第に張りて大に同族四十餘人を會せしめ、宴將に終らんご  
 するに及び麻譚末親ら起ちて衆賓に一揖し、我今亞刺比亞國中  
 にて他人の贈り能はざる現當二世の珍貨中無二の珍貴を諸卿  
 に贈らむ、そは諸卿を徵せご我に命じ玉ひし天神の靈言なり、抑  
 諸卿の中誰かよく我を輔けて此神命を成さしむる者ぞ、誰かよ  
 く我宰たり我友たるものぞ、嚴然ごて言ひ放てば、衆人或は  
 疑ひ惑ひ、或は侮り輕んじて答ふる者莫し、忽地一人あり、耐え兼



て進み出で、あはれ師よ、兒其人たらむ、誰にてもあれ師の命を聽かぬ儕あらば兒其齒を抜き眼を抉り脚を折り腹を刳かむ」と叫ぶを驚き見れば是當年僅に十四歳の一少年アリなり麻譚末之を聞きて大に悦びアリーを抱き會衆に對ひて曰く「是わが弟なり、わが使節なり、諸卿は皆此兒に従ふ可し」と衆すなはちアリーの父アブ、タレブを顧みて「卿も亦彼兒に従はざるを得じ」とて大に麻譚末師弟が狂妄を嘲笑せしかば、アブ、タレブも亦懇に阿姪が新教興隆の無謀非策なるを論じ其企圖を放擲せしめんご力めき然れども麻譚末は衆人の刺笑嘲罵をも、叔父の諫諍をも顧みず愈進みて其所信を貫かんごせしかば、ハシムの一族今は棄て置く可きにあらずごて、アブ、タレブに勸めて豫言者が偶像排撃の強暴を制止せしめ、若し聽かずんば已むを得ず、事を武力

に訴へんご脅迫せり。アブ、タレブも始は自渠等に對答して其意を和げしも、屢來り請ふに及び遂に麻譚末を見てハシム一門の意を傳へしに麻譚末毫も恐れず泰然として應へて曰く「假令他我右手に太陽を握らしめ我左手に太陰を抱かしむるも、我は決して此教を捨てじ」と其所信の確乎不拔なる其所志の堅牢不撓なる到底動かす可からざるを見てアブ、タレブもまた言はざりき。

然れども豫言者は郷里に尊ばれず、其所在を知り其幼時を知りたる市民は、群童に伍して默加街頭に遊び、商賈に交りて市場に來往せしアブ、アル、モターレブの孤孫が、今や天上の神意を曉さり人間の秘密を知れりご揚言するを見て、其狂妄を嘲り其不稽を笑はざるはなく、麻譚末の去來する所必ず嗤笑漫罵の惡







聲の件はざるなく、有爲敢往の一青年アムルの如きは哩謠を作りて豫言者を譏りしかば、坊間忽傳誦して好笑の材と做せり而して市民の反抗益激しくして麻訶末の志益堅く、聖宴の日祭祀の時に乘じ稠人群衆の中に顯はれ、公開の説教に私交の雑談に満腔の熱血を注ぎ、その唯一神教を唱道せしかば、默加の父老は愈憤慨し豫言者の諸叔父も益憎悪し、共に力を協せ心を同くして政教の革新を以て天職とせざる麻訶末が強固頑牢なる自任自信を打破せんことを誓ひ、アブ、タレブすら方石殿にその説教を罵りて市民よ、巡拜者よ、かゝる誘惑の言をな聽きそ、かゝる不敬度なる荒唐談に耳な傾けそ、速に起ちてアル、ラタ、妬神、マル、ウツ、ア、亞刺比を拜せよといへり。

アブ、タレブは斯く信教の上に於ては阿姪に反抗せしも、なほ

其名聲と身體とを庇護して、ハシム一族の昌隆を忌妬するの餘麻訶末を害せんとする他のコレイシ種の毒計を挫き來りしが、今や敵黨の媚嫉憤怨は敬神排異の名を假りて、國神を輕侮し國教を壞亂するの罪を以て麻訶末の徒を論ずるに至りて、さしものアブ、タレブも辯疏に苦しみぬ。コレイシ種の首長等屢アブ、タレブに迫りて曰く、卿の姪國教を誹謗して異端となし、國祖を罵詈して朦昧となせり、是國賊に非ずや、速に渠が口を塞ぎて民を惑はしむ可らず、卿にして若し姪を庇はば、我儕先づ渠を刺し其黨類を屠らざる可からず、而して卿自流血の責に任せざるを得ず。

アブ、タレブの沈毅にして温篤なる之を見て深く宗教的騷擾を惹起さんを患ひ、窃かに同族と謀り麻訶末をさとして身を隠



さしめ、其徒に勸めて難を國外に避けしむ。仍りて麻訶末はサフア  
 崗上なる弟子オルカムの家に潜み、其女ロカイアの婿オマン、  
 イブン、アファン以下男女の教徒十五人は先づエシオピアに遁る。  
 時に宣教の第五年にして是を回々教の前へシテラといふ當時エ  
 シオピア國民はテストリア派の基督教を信じたれども其國王  
 は正明の君にしてよく遁竄者を遇せしかば、年々共に世を狹め  
 らるゝ回々教徒は漸次海を越えてこゝに奔る者多く、兩三年を  
 出でずして其數男女老幼百餘人に上りき。  
 時に默加のコレイシ種に偶像信者アブ、ヤールありて麻訶末  
 がサフア崗上に隠匿せるを探知し、其家に至り之を痛罵打擲し  
 て暴行を極めぬ。麻訶末の叔父ハムザも亦熱心なる國教徒にて  
 じきりに阿姪の新教を排斥せしが、此暴行を聞くや憤怒措く能

はず、直に馳せてコレイシ種の會場に趣き、アブ、ヤールを射て之  
 を傷く。衆競ひ起ちて之に當らんとせしも、其勇に敵する能はず。  
 アブヤール衆を制して曰く、われ實に渠が姪を窘めたり、可し渠  
 を赦して去らしめよ。ハムザ眼をいからし叫びて曰く、可しわ  
 れも亦爾曹鼠輩の神とする木屑石塊を拜せむや、誰か善く來つ  
 てわれを制する者ぞ。傲然濶歩して去りて麻訶末に歸せり。是  
 よりアブ、ヤールは深く麻訶末を疾みしが、其姪オマール、イブン、  
 アル、カッターブ年紀方に二十六歳、身材長大、臂力衆に超え、豪放に  
 して武を好み、驍名四方に高し。叔父アブ、ヤールが麻訶末の事に  
 よりてハムザの爲に傷けられしを怒り、麻訶末を刺して叔父の  
 爲に怨を復せん。コレイシの諸人之を奇貨とし、駱駝一百頭、  
 黄金一千オンスを懸けて賞せんと約す。オマール大に悦びて





四



四



行かんごせしに、途上人ありオマールを遮りて曰く、卿サファに  
 行きて麻訶末を刺さんよりは、卿が妹の既に夫ゼイドと共に新  
 教を信するを禁せずや。オマール驚き馳せて妹の家に至れば、  
 果してゼイド夫妻正にアル、コーランを讀誦せり、則忿然戸障を  
 排して闖入し、ゼイドを踏して之を蹂躪し、利劍を把りて其胸を  
 貫かんごす。其妻走り來りて阿兄を遮り、面上を斬られながら毫  
 も屈せずして新教の信仰を説く。オマールよりて試にアル、コー  
 ランをこりて其第二十章を讀み、讀むこと多きに從ひ、感益深く、  
 讀みて復活天裁の篇に至り、忽然頓悟し、厚く妹夫妻に謝し、去り  
 てオルカムの門を叩き、麻訶末を見て懇に其教を請ひ、遂に其大  
 信者となりぬ。

麻訶末は其はじめに於て激く反抗を試みたるハムザ、オマー

ル等が斯く其教に歸服して、嚮に排斥に用ひたる熱心を以て、今  
 や教法宣傳の爲に盡さんごせるを見て、喜悅禁する能はず、また  
 窃かに其教を説かんごするにぞ、コレイン種は、ハシムの一門が  
 陰に豫言者を扶持せしが故に、禍根の滅せざるを憤り、悉く市民  
 を方石殿前に會し、市民は教敵を助くるハシム門族と賣買結婚  
 其他一切の契約交通を絶ち、麻訶末を神庭に引くにあらざれば  
 決して彼一門と和解す可らずと誓ひ、誓盟の言を羊皮紙に認め  
 て、殿前に掲げ、一面には紅海の水路を遮断して、教徒と教主との  
 通同を防ぎ、一面には使節をエシオピアに遣はして、厚く國王に  
 贈り、遁竄者の送還を求めたり。しかもエシオピア王は回々教徒  
 を庇護して、コレイン種の請を斥け、また何者のもたりけむ、方石  
 殿前に掲げし誓紙は何時しか棄却せられ、反りて神名を認めし



ものゝ代りたるにぞ、法禁竝に解けて麻訶末はサフの隠棲を出  
で、また黙加城裡の豫言者となりぬ。時に宣教の第十年なり。

第五 豫言者の市

隊商となり賈人となり四十年間平和の生涯を市井のうちに  
經し麻訶末は豫言者となりてのちこゝに十年なほ正道を踏み  
平和を求め、危害屢身に迫れども只管敵を避けて力を以て争は  
ず、説法弘教に日を費し夜をこめてはや半百の齡を迎へしが、サ  
フ崗邊の隱棲を出で、黙加にかへり來て後、幾もなく、教の上に  
てこそ罵りもし争もしたれ、其身の爲には幾度か危難を救ひ吳  
れし叔父アブ、ダレブは病に臥して「コレイシ種の我、死に瀕して  
心挫けし故、刺らずば、今改めて新教に歸せむ」と最後の改宗を

名残として冥幽の人となりぬ。麻訶末が悲はこれのみならず、妻  
として、徒弟として、當初より幾多の内助を與へしカヂエも亦ア  
ブ、ダレブに後るゝこと三日、六十五歳を一期として歸らぬ途に  
赴きぬ。豫言者カヂエとの間にハカセムを長として四個の男  
兒ありしも皆夭折し、別に四個の女兒ありかしは、是に於て麻訶  
末は今茲甫めて九歳なる女フナヤをもてアリーに嫁し自己は  
サマの女サウダミアブ、ベケルの女アエシヤを娶りて繼室とな  
しぬ。後日に至りアエシヤが麻訶末にカヂエは老たりき、天神は教  
主に更に若く美しく善き妻を授け給ひつらん、「語りし時、カ  
ヂエより若きはあらむ、また美しきもあらむ、されどカヂエより  
善きは莫し、世人悉く我を疎んじ斥けし日、我を信じて疑はざり  
しはカヂエなりき、我いたく困窮せし日、我を援け勵まし、もカ



ギエなりき」と答へしとぞ斯くまで陸しかりし妻に先立たれて  
 は麻訶末が悲嘆いかなりけむされどその憂はなほ美しきアエ  
 シ等に慰めらるゝかたもある可し堅壘も身の楯もたのみ  
 てし叔父アブ、ダレブを失ひては老殘の身を以て逆境に立ち眼  
 前の迫害防ぎ兼ねるものから、ゼイドを従へて黙加より約三十里  
 なるタイフに去り、叔父アル、アブバスが蔭に立ちて新教を宣へ  
 んとせしに、此處も亦偶像の信仰堅くエル、ライトの女神の石像  
 に珠玉寶石を飾る地と志を伸ぶべくもあらざるにぞ、居るこ  
 と僅に一月にして手を空くして又立歸る故郷の天業風益荒み  
 て塵海の波浪愈高く、教敵の反抗は日と共に迫り來ぬ。  
 熱心なる偶像信者、ハシム族の舊讎オミヤ派の首長アブ、ソ  
 ヲアンは時に黙加の全權を掌握してしきりに麻訶末の勢力を

削らんと謀りしに、偶麻訶末が黙加城外の崗上に教をヤトレブ  
 の民に宣へしかば、窃にコレイシ種及其黨與を會して議すらく、  
 麻訶末をば如何にす可き、之を鐵窓の下に繋がんか、悲憤慷慨し  
 て益狂熱を加へん、之を流竄に處せんか、三寸不爛の舌鋒を鼓し  
 て忽ち州縣を風靡せむ、如ず各族各人おのゝ一劍を把りて渠  
 を刺し怨恨をハシムの一門に報ひ、一舉して禍根を斷たんには  
 こそ然るに神明の佑助か、はた人爲か、暗殺の密謀端なく漏れてし  
 かば麻訶末は夜に乗じて獨身家を出で、アブ、ベケルを誘ひ相携  
 へて脱る、既にして刺客至り、戸隙より視へば、臥床の上、緑衣の人  
 あり、以て麻訶末をなほ復疑はず、或は直に入りて之を刺さんこ  
 いひ、或は天明を待ちて其出づるを斬らんといひ、議決せず、遂に  
 戸を排して入り見れば、緑衣の人は麻訶末にあらずして其徒弟



フリーが教主の衣を假りて難に代らんごせしなりき刺客大に其義に感じ敢て殺さず急に奔りて麻訶末を追ふ。時に麻訶末師弟は辛く虎口の難を遁れ、黙加を距ること一里餘なるトールの洞穴に潜み隠れ、アブ、ベケルの女アサマが夕毎に運び呉るゝ情の糧に餓を凌ぎ暫時城中の消息を伺ひしに、コレイン種は百方手を別ちて其踪跡を尋ね悉く黙加城下を索り盡くしゝも其功なきにぞ、遂にトールの洞穴に及びぬ。至り見れば、扱はこゝにもあらざりきこて洞中をさわめて引返しぬ。洞中には追兵至りしと物音に知りて、吾儕は唯二人なれば「アブ、ベケルの打慄へば、否三人なり、天神の護らせ玉へば」麻訶末の慰め勵ませしが、やがて敵退きぬと見るや否、急に洞穴を出て、

アブ、ベケルが奴の牽き來りし駱駝に騎り程を貪りてヤトレブに走りぬ。あはれ此際一條の飛槍あらば師弟二人の生命は原頭の露と碎けて、新しき亞刺比亞の教は遂に世に知られやみたらんを誠に回々教の爲には危機一髪を容れざる大厄を免れし神祐天助とも見らる可し。されば後サラセン帝國第二世の哈利發オマールの朝に及び此日を立て、回々教國の紀元となしエ、ル、ヘシラといふ、ヘシラは移轉の義なり。實に皇朝にては厩戸皇子薨去の翌年にして、基督紀元の六百二十二年七月十六日にあり、麻訶末は年紀方に五十三歳なりき。是よりさきヤトレブの市民方石殿に養ひてアルカバ山に登り、はじめて麻訶末の教を聴き、うち六人は新教に歸依し、ヤトレブに歸りて之を市民の間に傳へ、幾もなくして若干の信徒を得



たり次でヤトレブの信徒等相謀り、使節を黙加に遣はし、城外の山上に於て夜間教主麻譚末に謁する。ここ二回始は十二人の信徒其妻孥及同志の名をかけてながくユーランの教を奉せんことを誓ひ、次で七十三人の男子二人の婦人麻譚末及其姻親徒弟と會して神誓を訂し、ヤトレブ市の名によりて若し不幸にして教主黙加を去るの日來らば協力同心して迎へて師長と仰ぎて其命に服従し死に至るまでかはらじと誓ひ、たゞ若し黙加の使者至らば教主は吾儕を捨て、故郷に還らんことを恐る云ひしに麻譚末頭を振りて「否、汝曹の血は我血なり、汝曹の敗滅は我敗滅なり、汝曹と我とは名譽と利害との繫縛を以て結ばれぬれば、我は汝曹の友、汝曹の敵は我敵なり」といふ。ヤトレブの信徒之を聴き狂喜して「さらば吾儕聖教の爲に殉せば何の報をか受

く可き」と問へば、麻譚末寛爾として「天國樂土と答へぬ。此第二回の師弟の約束こそやがてサラセン帝國の中樞となり根底となる可き君臣の政治的盟誓なりき。」  
 トールの洞穴に危くも敵の手に落ちんとして幸に免がれし麻譚末師弟は風聲鶴唳にだも心を置きながら、紅海の濱を北に向ひて奔る。ここ十又六日にして漸くヤトレブの此方なるユバに着きたり。兼てより豫言者麻譚末故郷を遁れしと聞きしヤトレブの民は、あはれ疾く此地に來よかしと待ちに待ちたる。ここて今や師弟ユバに着きしと聞き、直に出で、之を迎ふる者五百餘人、麻譚末を牝駱駝に乗せ、天蓋を以て之を蔽ひ、頭巾を解きて旌旗に擬し、整々堂々としてヤトレブに入りたり。是よりしてヤトレブの市を號してメヂナト、アル、ナヒ(豫言者の市)といひ、遂







に省略して軍に默思那市の義の名高く聞ゆるに至りぬ。  
 五十餘年來平和の夢破れて異郷に竄り天涯の逐客となりし  
 麻訶末は今や默思那市民に歓迎せられ其地の一孤兒が遺地を  
 得てこゝに一軒の住家一座のモスク(寺院)を築き金銀の神  
 璽を鑄て使徒の號を刻せしがなほ毎週の式會には椰子樹下に  
 立ちて祈禱を捧げ法を説き久しくして後はじめて粗笨なる楊  
 子と祭壇を作り儉素下に臨み力めて民心を收攬し親らアリ  
 一と兄弟の義を結びて例を示し默加より後を追ふて來り投ぜ  
 し舊信者と默思那にて歸依せし新宗徒をして互に同胞の約を  
 盟ひ相提携勵精して事に當らしめ神人の二權を兼ねたる至尊  
 法君として神智天職を具足したる無上判官として默思那市に  
 臨み最卑賤なる一信徒と雖も必ず死に至るまで庇護保擁せん

ご約してイスラムの教に心服せしめ默加の一使節をしてわれ  
 百兒士亞のユスロエス、羅馬のカイザルに謁せしも其君王の尊  
 未だ麻訶末に及ばずと驚嘆せしめ昨は平和なる天來の使命を  
 傳へし爲故郷に逐はれし身の今は一市の宣戰講和の大權を握  
 り古聖先哲がしばしば神怪の異力を以てせし如く劍によりて  
 教をひろめよこのガフリールの言天外より下り勸誘説服の方  
 便は既に盡くしつ假容寛忍の時節は早過ぎて偶像の信仰を打  
 破し星辰の神聖を排撃し異端を攘ひ邪道を伐ち一神の聖教を  
 傳播せん爲に教主麻訶末は遂に法の利劍を掲げて起てり九口  
 の劍三條の鎗七本の矛一個の簾三張の弓七領の甲三枚の楯二  
 個の兜黒旗白旗二十頭の神馬は新教々主が弘法宣教の第一要  
 具となれり蓋古へブライの軍律は亞刺比亞の兵規よりも更に



峻酷なるものあり猶太人の進むところには軍神先だち一市招諭に應ぜざれば滿城の士女玉石共に碎け迦南の七國は爲に亡びたりきされば宗教弘通の道を干戈に托するはモゼス以來其例あり況や麻詩末が新教傳播の法は同盟か臣従か貢献か然らざれば戦あるのみと曰ふをや若し其求に應じて苟くもイスラムの教を奉ずれば舊徒弟と同じく法俗二界のあらゆる利益は頒與せられ豫言者の旌旗の下に堂々たる新教傳播の軍に従ふて進むを得るをや貢献は不信の徒が不虔の罪を轉じて信教拜神の徳となし得可しと約せる麻詩末は未だ嘗て一たび歸伏したる者を再び蹂躪せしことなきなり然り而して亞刺比亞人の勇武にして不利の地に在るはじめより一種の寇盜草賊にしてその隊商の生活は恰も行軍征旅に異ならざるが故に此人民を

驅りて兵ごなすは最易し加ふるに豫言者の規定せし神法にては金銀俘囚動産不動産の別なく掠略の物品は五分の一を割きて慈善救済の費用に充て其他は悉く將卒に平分し戰場に斃れし者は其寡婦孤兒を撫育して殉道の義に酬ひ人ご馬ご賞を別ちて騎兵を奨勵し且女俘を妻妾ごなすを許して凡俗野卑なる殉道者の爲に富貴ご美人ごを以て天國樂土の模型を示しつねに教徒に向ひて利劍は天堂地獄の鍵鑰なり神の爲に注ぐ一滴の鮮血道の爲に宿する一夜の舎營は一月の齋戒祈禱に優れり戦死者は現世の罪科悉く消滅して天裁の曉其痼疾は銀朱の如く耀き蘭蕙の如く薫り脚を失ひし者には天使の翅を生ぜんご揚言し不撓不屈なる亞刺比亞人の勇氣を鼓舞振作して默思那城頭白旗懸りて十年の攻城野戦五十餘回劍光によりてイスラ



ムの教を擴め、靈界の教國を現實にたつるに至りし神聖軍略は  
端をこゝに發しぬ。

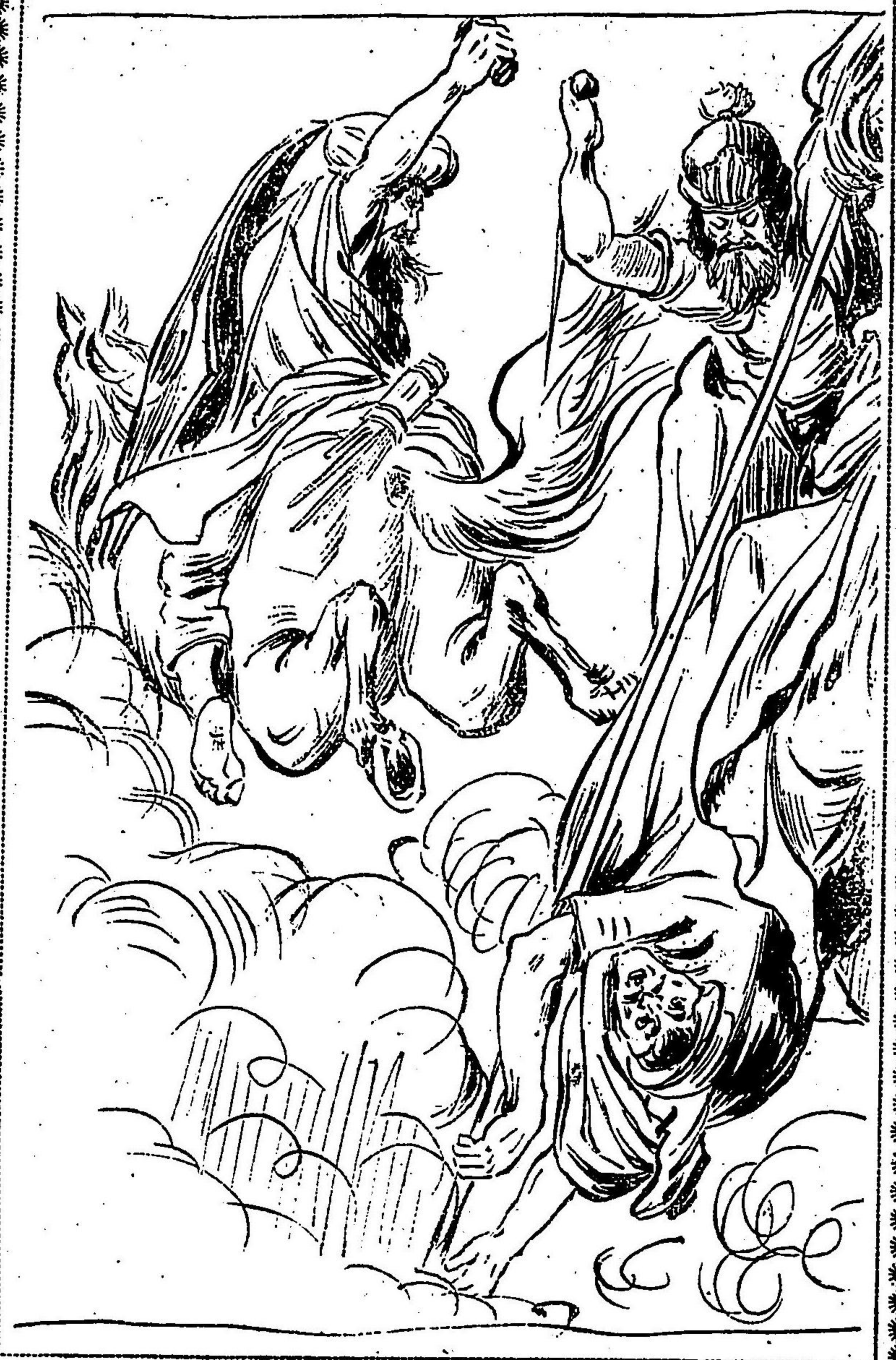
第六 アブ、ソフ、ファン

エル、ヘシユラの第二年教主麻訶末は從來エルサレムを以てケ  
ブラ 佛禮の際四方を拜するが如しは となしを改め、默加を以て之に代  
へ、ラマダンの月を以て齋戒の期となし、人をしてアラ、アクハ  
ルと呼びて市民を祈禱會に參集せしむること等を規定せり。  
若し此際路を默思那附近に取る默加の志利亞貿易商隊にし  
て此教徒が剽掠を蒙らざりせば、コレイシ種の人々も單麻訶末  
の遁亡を以て満足せしならんに、不幸にして争は此より起り干  
戈ヘデルの野に閃きて、アブ、ソフ、ファンは麻訶末と戰陣の間に相

見るに至りき。

此歲默加のコレイシ種の首長アブ、ソフ、ファン親ら千頭の駱駝  
を宰し三十人の隊商を將て、志利亞より歸らんとするや、回々教  
の神聖軍路を扼せりと聞き、急を默加に告ぐ。默加市民報を得て  
大に駭き、速に救はずんば商貨穀糧盡く敵手に落ちんこと、齡已  
に七旬なる老將軍アブ、ヤールをして卒七百五十騎、二百を將て  
星馳難に趣かしむ。アブ、ソフ、ファンは路上に捨てたる椰子核を見  
て敵情を察知し、其鋒を避け迂路をとりて紅海の濱に出で、援  
軍と會す。是に於て默加の軍は進みて、默加を距る十六里、默思那  
を距る八里の地ヘデルの沃野に至り、默思那の神聖軍と相逢ふ。  
麻訶末は谿間の流水を前に當て、敵を待ちしが、其軍は七十七  
人の從奔者默加より奔りし教信徒を中堅とし、總勢三百十三人、戰陣の馳







驅に馴れたるヤトレブの駱駝は七十頭の多きあれど馬はたゞ  
 三騎に過ぎず、數に於て遙に默加の軍に劣りたれば、斯く見し  
 敵軍は鼓躁して進み、中にもアブ、ソフ、アンの舅オタは弟シヤ  
 バ、一子アル、ワリッドを従へて眞先に討つていづ。默思那の軍中よ  
 りオベイダ、ハムザ、アリーの三人進み出で、之と戦ひ、ハムザは  
 シヤバを、アリーはアルウリッドを斬つて落し、共にオベイダを助  
 けてオタを討取りしも、オベイダも亦重傷を受けて其場に斃れ  
 ぬ。之をいくさの始として、兩軍互に入亂れて戦ふ程に、麻訶末は  
 「噫、天神、若し我軍潰えなば誰か復現世に天神を拜する者あらむ、  
 奮へ吾兵、箭を放て、捷利は吾に在り」と神を祈り、軍を勵まし、遂に  
 親アブベケルと神座に上り、切に胸上を叩きて三千の天使に降  
 援を禱り、首を回して戰場を看れば、あはや其兵敗れんとす。仍て

急に神座を下り馬背に跨り陣頭に駆けつけ、一杯の土砂を空中  
 に撒じ、敵の眼を昏迷せしめよ」と叫び、叫びし聲雷霆の如く聞え  
 て忽焉空際より數千の天將神卒簇り降る。見し默加の軍は崩  
 れ潰え遁れ走れば、大將アブ、ヤールも亂軍のうち馬の大腿斬  
 下げられて大地に落ちて敵に討たれ、其外戦死者七十餘人、神聖  
 軍の死せし者は僅に十四人に過ぎざりき。是有名なるベデルの  
 役にして、實に麻訶末が四方經略の旗風に吹き靡けたるサラゼ  
 ン帝國の第一勝利なりとす。  
 默加の援軍一舉ベデルの野に顛りしと聞きては、コレインの  
 人々皆疊の亡命の孤客が忽にして恐る可き勁敵となりしに驚  
 き、禱裡に病みて敗報に接せしアブ、ラハブの如きは憤怨慷慨病  
 急にすゝみて遂に幽界の鬼となりぬ。而も就中深く怨を肺腑に



彫みし者はアブ、ソフアンにして、幸にして隊商は完を得たるも、復砂漠を横りてエウフラテスに出つるに能はず、父、叔父、同胞を敵に討たせし妻ヘンダガしきりにハンザアリーに怨を報ひんご迫るにぞ、日夜肝膽を碎きて復讐の舉を企て、先づ死士二十騎を募り鞍の前輪に糧囊を結び、麻訶末と鋒を交ふるまで染薫聲色の慾を斷つ可しと誓ひて黙加を發し、鐵蹄直に牧場を蹶りて默思那門外里餘の地に殺到す。麻訶末斯く聞くと、大勢を以て出で迎へしかば、アブ、ソフアン衆寡敵せずと想ひけむ、先づ馬に策ちて奔り、其兵皆糧囊を捨て、潰散せり。これを糧囊の役といふ。

麻訶末前にベデルに勝ち、アブ、ソフアン後に糧囊の役に走りしかば、新敵の勢は日に熾にしてコレイン種は大に安んぜず、べ

デルに死せしアブ、ヤールの遺子アクレマも亦切に亡父の怨を雪がんとてアブ、ソフアンに説きしがば、エル、ヘシラの第三年に至りソフアンまた甲兵七百、騎兵三百、其他の諸兵を合せて總勢三千人を募り、駱駝三千頭を發して默思那に推寄せぬ。妻ヘンダも亦之に従ひ、途にアブラの村を過ぎ、麻訶末の生母エミナの墳を發く。麻訶末は叔父アル、アブバスの報を得て、衆を會して備に守城の利を説きしに、少壯氣銳の徒ベデルの一勝に誇りて皆出て戦はんといふて可かず。麻訶末乃兵を募りて僅に一千人を得たり。衆皆逡巡す。麻訶末曰く、既に劍を脱すれば豈藏む可けんや、既に進まんごすれば空しく退かんや、成敗は神意にあり。ご北に向つて進むご二里半オウド山に至る比、衆遁れ去りて残る者九百人のみよりて、射手五十を山腹に備へて俯瞰に敵を射さし



め、麻訶末は兜を蒙り二重鎧を穿ち、神劍をアブ、ヅヂヤナに與へ、神旗をモサ、プに授け、親本軍を率ゐて敵に向ふ。アブ、ソフ、アン之を看てアレクマを左に、カレットを右に、親中央に進みしが、兩敵已に近くや、默加の左翼先づ進みて射白まされて退にぞ、ハムザ直に軍を麾きて之に乗じ、自敵の旗手アルタを斬り、セバを斬ればアブ、ヅヂヤナも敵の七旗手を斬りぬ。斯てハムザは亂軍のうちに斃れしも、默思那の軍奮鬪激戦始ご敵を突崩せしに敵の驍將カレドは鐵騎を率て横さまに默思那の軍の後を包み、イブン、カミアはモサ、プを斬りて、教主麻訶末を討取りぬ。喚き叫びて斬入るにぞ、默思那の軍は氣を吞まれ、驚き惑ひて度を失ひ、雨に降り來る矢石の下に生命を落すもの七十人、麻訶末も亂軍の中に面に二條の箭を受け、テラ、オマル、アブ、ベケル等何れも傷を負はぬは

なし、さしものオトマンもなだれかよりし味方に推され心ならずも走りしが、暫時ありて教主は尙無事なりと知れ渡りしかば、神聖軍は盛り返し、力を盡し手をくだき漸く敵の重圍を斬り破り、教主を守護して辛くも近村に引揚げたり。

はじめ默加の軍殆ど敗れぬと見えければ、後陣に控へしヘンダ等の娘子軍は逸早くも遁れ走りしが、今や味方の勝利と聞きてかへり來つ、無殘にも討死なせる敵兵の耳を斫り鼻を削ぎ、果は麻訶末の叔父ハムザの臟腑を抉り出してうち喰へば、アブ、ソフ、アンも其頬肉を槍先にさし貫き高く棒げて勝敗は常なきも、哉、ペデルの敗後にオウドの捷あり、あはれホバルの軍神、今日こそは汝の教徒の勝軍よと勇み誇り、一年の休戦を約して默加にかへりぬ。



敵軍既に退きしかば麻譚末は戰場を巡視し深く敗績の跡を  
 いたみ厚く陣没者を葬りて其冥福を修し特に叔父ハムザの爲  
 に懇に祈禱をなし神獅ハムザと唱へて幽魂を慰め徐に殘兵を  
 収めて默思那に入れり。  
 然るに此一敗より默思那市民のうち教主の神威靈武を疑ふ  
 者生ぜしかば麻譚末は百方其惑をさとし疑を解き全軍の敗れ  
 しは罪ある者の加はり居たればなり剽掠を事として吾命を用  
 るざりし故なり而も此一戦によりて信を不信を分つ可し況  
 や死生も天命ありて古賢先哲皆敗衄滅亡を免れず誰か敢て  
 能く享天の定命を延ぶ可き生命あれば矢石の間に立つも死せ  
 じ時至らば褥中に在りても斃る可きなり且夫道の爲に殉せし  
 者は天國に至りて當來の永樂を享けむと説きしかば是よりし

て其教徒は勇悍強武の性に加ふるに天命の確信を以てし死を  
 視るこご歸するが如く其鋒益鋭く遂に四方經畧の大業を成し  
 得るに至りき。  
 翌る年麻譚末はアサダ部が默思那附近を攻畧せんとするを  
 聞き一隊の兵を遣はして其地方を剽掠せしめ次でホダイラ部  
 長が兵を起さんとするを告ぐる者ありしかば刺客を放ちて之を  
 刺さしめき此年アムルは教主の密旨を受けて默加に趣きアブ  
 ソフアンを刺さん企てしが事顯れて逃れ歸りぬ。  
 教主一日友を訪ひしに方に結婚の宴を開き置酒盛會衆賓皆  
 歡を盡くして和氣洋洋たりしかば大に酒徳を頌して去る翌日  
 再び其家を横ざりに思ひきや手足處を異にし鮮血淋漓床を  
 浸し臆風腥氣人を襲ふより隣人につきて痛飲亂酔の後喧擾



争闘して此に及べるを聞き、いたく酒の害を恐れ、かへりて直に飲酒賭博の二戒を立てたりき。

一年の休戦を約して其間に漠中の諸族及びナデルの猶太人  
と欺を通ぜしアブ、ソフファンは、エル、ヘシユラの第五年に至りガタ  
ファン以下の諸部落市邑を聯合し同盟軍一萬を起し來りて復  
默思那をうつ。默思那爲に震駭し、或は和をいひ或は内應を謀る  
者ありしも、麻譚末は毫も恐れず、波斯人サルマーンの策を用ひ、  
深壕を穿ちて敵の進路を斷ち、親ら兵三千を率て、出で、壕を前  
にして敵に對し箭戰に時を消して敢て出でず、曠日持久徐に敵  
の變を待つ時に猶太コライダ部族窃に欺をアブ、ソフファンに通  
じ、後より襲ふて默思那を取らんごせしかば、麻譚末いたく之を  
患ひ、默思那の椰子實三分一を以てガタファンの心を誘はんごす。

ザド憤然として曰く、是天神の言歟、將教主の命か、若し教主の命  
ならば云はむ、渠等椰子實を得んご欲せば劍によりて得可し、胡  
爲ぞわれより進んで之を渠等に頒たんやご議すなはち已む。是  
に至り默加の軍無事に苦しみ、一日ユレイシ種の勇士カヂエの  
叔父アムル、アレクマ、ナウフル等三騎壕の最狭きごころを見定  
め馬を躍らして之を超え、轡をならへ來りて戰を挑む。默思那の  
陣よりアリー之を見、馬を飛ばして出づれば、やさしの業や、我刀  
下の鬼ごなれごアムル馬を下りて懸る。我こそ卿の首級を受け  
むご、アリーも地上におりたちて、共に蹶立つる砂塵の裡に劍光  
刀影紫電の如く一虚一實奮撃突戰、アリーはアムルを斬つて落  
す。残る二人は之を見て馬首を回へして逃れしが、ナウフルは誤  
りて壕中に落ちてしかばアリー追及して之を刺殺し、更にアレ



クマを追ひ飛槍を投じて之を傷く、敵軍望見して恐れ怖き、また出づる者なし。麻譚末此機に乗じ、新に其教に歸したるガタフン部のルエイムを放ちて敵中に入り、コライダ族とコレイシ種を離間せしむ。二者すなはち相疑ふてまたなすなし。さる程に一夜颶風猛雨大に起り、雲霧晦冥咫尺を辨ぜず、同盟軍の陣中、張幕破れ燈火滅し、人馬喧騒互に相踏みしかば、城中には以て天神の冥助さなし。喜び勇むに引かへて、寄手の軍は士氣愈沮喪し、諸部諸隊各自引去りしかば、アブ、ソフ、アブも百計盡き、圍を解きて空しく黙加に退きぬ。

第七 教の國

猶太人にして新興の回々教を奉じたらんには、エルサレムを

以てケブラさなし。又麻譚末より、幾多の利福を享けたりしならむ。然も其剛復なる極力亞刺比亞の新教を排せしより、大に麻譚末の怒を買ひ、長く其害を受くるに至れり。黙思那在住の猶太カインノカ種の一人亞刺比亞の一人婦人を辱しめしより、事端を發しイスラムに歸依せんや將た戰はんやと問はれし時、猶太人は、噫、吾曹は兵をこる術を知らず、而も祖先の遺教を奉ずるなり、胡ぞ吾曹を攻むるの酷なるやと答へしかば、麻譚末乃猶太人を攻めて之を圍む。こ十五日、悉く其貨財兵器を収公し、其徒七百餘口を志利亞に放つ。時にペデルの役ありしかば、黙加の猶太人カブ詩を作りて、黙加市民の爲にペデルの敗を弔して、其敵愾心を鼓舞し、次て黙思那に至り、其詩を下民婦幼の間に流傳す。麻譚末聽きて不祥さなし、窃に人を遣はしてカーブを誘ひ殺さしむ。猶



太人是より益麻訶末を恨み、之を刺さんとして成らず、遂に窃に  
 アブ、ソフアンに通ぜしかば、今や同盟軍解潰せしを以て麻訶末  
 直に兵を進めてコライダ部を攻め、廿五日にして之を降し、男七  
 百口を生ながら市場に埋め、婦女童幼は悉く奴婢に賣り、甲三百  
 領、矛五百本、槍千條、家畜若干を獲て還りぬ。  
 時に麻訶末、默加を思ふと切にして、一夜方石殿の鍵を携へ徒  
 弟を率ゐて禮拜の儀式を行ふと夢むより、翌日衆を會して之  
 を語る、衆皆これこそ默加征服の瑞夢なれと解きて勇み立つに  
 ぞ、教主も去らば行けやとて神旗を出し進發の令と下しぬ、犧牲  
 の料にて駱駝七十頭を士卒七百人に牽かせ、途上萬一の變に  
 備ふるため精兵一千四百人を引率して、默思那市を出づれば、四  
 方聞きて來り従ふ者引きもきらず、默加のコレイン種は此報を

得て大に駭き、急に兵を起して默思那の大衆を默加城外二里半  
 の地に邀ふ、麻訶末は敵兵の出で、進路を扼せしを見、衆をボタ  
 イピアに駐め、使節を遣りて唯方石殿に養せんと欲するのみに  
 して、また他意なきを辯ぜり、コレイン種之を信ぜずして將に使  
 節を斬らんごせしかば、使節辛うじて遁れかへり、之を麻訶末に  
 告ぐ、麻訶末よりて更めてオマルを遣さんごすれば、オマルはコ  
 レイン種族と相善からざるを以て辭す、則遂にオトマンを遣り  
 しに、默加の軍捕へてかへさず、默思那の衆皆オトマンの必ず斬  
 られしを信じ、麻訶末も亦其かへらざるを見て、遂に意を決し、悉  
 く部下を集めて忠誠を誓はしめ、將に干戈を把りて默加の軍に  
 向はんごす、然るに默加の兵八十先發し、備なきに乗じて默思那  
 の陣を斫らんごなし、番兵の爲に獲らる、麻訶末は寛厚の意を示



して衆心を収め  
 んご欲し悉く之  
 を放ち還したり  
 しかば、コレイシ  
 種はじめて和を  
 いふ。麻詞末其言  
 に聽き新教を慕  
 ふ。黙加の民の來  
 り投ずるご、新教  
 を捨て去らん  
 ご欲するものご  
 共に其意に任せ



しめ、自己及教徒  
 の黙加に入る時  
 は必ず兵器を撤  
 し滞留は三日を  
 限らんごを約  
 し、條約書の上に  
 自天神の使徒な  
 る號を削り、單ア  
 ブダラの子麻詞  
 末ご署名し、コレ  
 イシ種ご十年の  
 休戦を約しぬ衆





はじめ黙思那市門を出づるや楊々として黙加の降服を期したりしかば、今や教主か此る約束を結びしを見て皆悦ばず。方石殿に賽して犠牲を奉り頭髪を削るべしと命ぜられしも皆従はず。教主が手づから其駱駝を屠り落飾せしを見て已むを得ずして僅に之に倣ひしも衆心尙未だ全く平ならず。麻譚末大に困じ遂に神告に托し、歸りてカイバルを征す。カイバルは黙思那を東北に距ること約六日程の地に在る猶太人の巢窟にして、地味豊饒農牧に適し穀蓄共に多く、八壘を築きて其鎮となす。麻譚末騎兵二百歩卒千四百人を以て之を攻め悉く其八壘を抜き都市を下し、剽略をゆるして軍を賑はし漸く衆心を慰め得たり。此役アリは敵の驍將を斬りて勇名を博し、八人の力を以てするも尙動かし得ざりし都城の門戸を奪ひて楯に代へ、看る者をして其怪

力に驚かしめぬ。  
 此時に方り百兒士亞羅馬は互に相攻伐侵畧して西方亞細亞は年々して其災を蒙らざるなく、民皆歸適する所を知らざりしかば、麻譚末は其間に乘じて新教を宣傳し民心を収攬せんことを欲し、まづ璽書をエーマン副王に與へて百兒士亞王ユスロエス第二世にイスラムの信仰を説かしむ。適ユスロエスはパレスタイン、カバドキア、アルメニアを徇へ亞非利加を征し、西の方羅馬を威壓し、國富み兵強く、氣昂り意満ちて勢旭日の東天に昇るが如く、眼中また亞刺比亞の一豫言者なかりしかば、麻譚末の書劈頭まづ最大慈悲の神名によりてアブラダの子神の使徒麻譚末書を百兒士亞王ユスロエスに致す。ごあるを覽て大に怒り、奴輩、言何ぞ不遜なるごて書を破りてカラソー河中に投じ、若し此狂奴



の心を峻めしむる能はずんば速に其元を斬りて此に致せし副  
 王に令しぬ。麻訶末遙に之を傳へ聞き、咀ひて曰く「咄、コスロエス  
 天神汝の邦國を壞らん。こご當に汝が我璽書を裂きしが如けむ」  
 と後幾もなくして、コスロエスは果然毒手に斃れしが、エーマン  
 の副王はイスラムの信徒となりぬ。  
 次に麻訶末は書を羅馬帝ヘラクリウスに致してイスラムの  
 教をすゝめしに、帝は其使節をエメサに見厚く之を犒ひて遣り  
 かへせしが、而も其信教の上にては殆んど願ふところなかり  
 き。之に反して埃及のムコウキスはもと羅馬帝國の一代官に過  
 ぎざりしに、帝國が比年百兒士亞と攻争せる隙に自立して僭主  
 となり、此に及びて麻訶末の書を受けて直にイスラムを奉じ、寶  
 貨麻布、密醬、驢、騾、龍馬及び二麗姫、マリヤ、シレンを献じて忠誠を

表し、エシオピア王、亞刺比亞の諸市諸部の長酋等も皆相つぎて  
 その教に歸依し、默加の勇將カレド、アムル、オトマン等も亦此際  
 威徳を慕ふて來り投ぜしかば、麻訶末の勢は日を追ふて強大に  
 赴きぬ。然るに志利亞ボストラの奉行麻訶末の使節を斬りしよ  
 り、北方の戰雲忽動き、默思那の神聖軍は、星馳電奔敵の備なきを  
 撞き、婦幼僧侶を憐み一屋を壞らず一草を斫らず、其民を撫て、  
 其教を立つ可しとの教主の訓令を受け、ゼイドを大將となし、ア  
 リーの弟ヤーフル詩人アブラを副とし、其勢總べて三千人、直  
 に北を指してパレスタインに入る。此事早くも聞えけむ、羅馬志  
 利亞の大軍、亞刺比亞の師を粉塵せんとして、旗鼓堂々南に下る。是  
 に於て南軍のうち更に教主の命を待ちて動かんといふもの多  
 かりしも、アブラ「吾曹は教の爲に戦ふ耳、若し戦死せば天國に



生れむ、若し敗滅せば道に殉せむ、と衆を勵まし、進みてムタに抵りて北軍を邀へ撃つ。而も衆寡素より敵せず、勝敗の數はじめより明にゼイド先づ斃れしかば、ヤッフル代りて神旗を守り、右手を失ひて左手に捧げ、左手また斬らるゝに及び、雙脚を以て之を擁し、身數十創を蒙りて亂軍の中に死じたり。アブダラ之を見て直に進みて高く神旗を掲げ、進め吾兵、勝利莫きも天國あり、と連呼し、苦闘力戦、また敵手に斃れぬ。時にカレド従ふて軍に在り、三將皆斃るゝを見、奮然身を挺して進み、神旗を守護し、手づから敵の九刀を折り、雲霞の如く推寄する北軍を斬り靡け、遂に陣中に撰ばれて將となり、翌日早昧兵を四方に配し、大に軍容を張りて敵を惑はしむ。敵望見して南方の援軍大に至ることなし、漸く師を収めん。す。カレド乃軍を靡きて追ひ撃ち、大に之を破り、分捕を載

せて南にかへる。是よりカレドを綽號して「神劍」と呼び、驍名北方に震ふ。  
 默加のコレイシ族は此間に乘じ、麻哥末の與國コザイトを征せしかば、麻哥末は以て十年和平の前誓に背きしことなし、密に兵一萬を集め、オマールを將とし、晝は幽谷を行き、夜は火光を徹し、程を貪り急に默加を取らんとして、マル、アサランの谿に至る。アル、アブバス事の太急なるを知り、薄暮教主の驢に騎りて默加に入らん。途にオマールの手に捕へられたるアブソファンを救ひ、説きて麻哥末に降らしむ。是に於て默加市中復一個の麻哥末に抗する者莫く、嚮に故郷に尊ばれざりし豫言者は今や故郷に還り來れり。七年の前は師弟二人相顧みて相憐みし天涯落魄の客、七年の後は亞刺比亞諸部の盟主として萬卒を叱咤する無



上の神王、想へば假令イスラムに捧げし宗教の人もなほ人間幾  
千の感に堪へざりしならむ。

往昔羅馬を逐はれしスキルラ、マリウスの志を得て再び國に  
入るや、府民を屠りて死尸の山を築き鮮血の河を流したりしが、  
今麻訶末の故郷に還るや怨敵の巨魁アブ、ソフアンをすら赦し  
志たゞ信仰の上に報ひんごするにあれば、堅く三軍を誡めて秋  
毫だも犯さしめず、其將カレドが市民箭を放ちて拒みしを憤り  
廿餘人を斬り捨てしと聞くや、急使を發して之を制せしむ。而  
に使者至りて教主の使命なりと稱し悉く一隊の民を斬らしむ。  
麻訶末使者を召して之をなじれば、臣は教主の命を傳へたり。而  
も天神の命は之を殺すにありしを如何せむと答へぬ。又カレド  
はヨダマ部の民が嘗て其叔父を殺せし怨に報ひん爲悉く其徒

を誅せんごすと聞き、麻訶末はアリーユ黄金を與へ、ゆきて劊手  
に賂ひて生命をたすけしめき、斯く寛容大度を以て舊怨に酬ゆ  
るものから、ユレイシ種の父老等皆來りて麻訶末の前に遷拜し  
て哀を請ふ。麻訶末之を見て、卿等は嚮に害を加へんごせし孤に  
對ひて今はた何をか求めんごするやと問へば、父老謹んで、若し  
昔日姻親の情を思ひ玉はゞ、必ず寛典のあらんを信じて、ご應ふ  
るにぞ信じてごいふ歟、可矣、行け、生命を助けむ、皆自由の民たれ  
ごてまた其罪を問はず、かくて悉く市中の男女老幼を釋してイ  
スラムの教を奉ぜしめ、唯平素深く恨を累ね怨を積みし十餘人  
の男女のみは、見當るまゝに斬り棄てよと令せしが、夫さへ多く  
はイスラムを信じて生命を請ひ得たりき。

默加己に降りしかば麻訶末は駱駝に乗りて方石殿に詣り殿



堂を廻るここ七回、節鞭を延べて神石を叩き、カレド等をして三百六十體の神像を引出して、碎破せしめ、四方に向ひて七度神偉矣を唱へ、復方石殿を七周し、ゼゼの聖泉を汲み來りてアブラハムの故趾に飲み且浴し、衆人を集めて教えて曰く、神約を果し怨敵を夷け、萬象を左右するものは天地の間に唯一神あるのみ、噫コレインシ、假令卿等の曩祖は阿當より出たりとも、之を尊崇禮拜するは異端たるを免れず、故に我今天神の意によりて之を除けり。こよりて復老幼男女をアル、サフの崗に集へて教主に忠誠を誓はしめ、黙加を神地靈域とさだめ、一滴の血も流すべからず、一本の樹をも斫る可からず、一人の異教者をも入る可からずと嚴令せり。

さなきだに榮枯盛衰によりて向背離合を決するは凡俗のつ

ねなるを、黙加さへ早降りぬと聞き傳へては、亞刺比亞の諸部族は何かコレランを讀誦し、イスラムに歸依せざらむ、天下を擧げて殆ど皆新教の白旗に靡きふすうちに、獨昂然として祖先傳來の宗教を奉じ、豫言者が打破せんと言ひし偶像を誓ひて守護せんとして起りし、タエフの同盟は、ハワガナ、タキナ、サアダの諸部族を連結し、窺かに四千の同盟軍を起し、新降のコレイン種が必ず内應せんことを恃に、急に發して麻譚末の不意を撃たんごす事何時しか此方に聞えければ、默思那、默加の旗出でムベド井ンの大衆之に加はり、麻譚末の衆無量一萬二千人進みて敵を迎へんご、オナインの谿谷に出づれば、敵兵早く地の利を占め崖壁の嶮に據りて矢石を飛ばすこと、雨霰の如く、面を向く可き様なければ、多勢の味方はうち亂れ、號令行はれず、勇武用ゐるに地なく、教



主麻哥末も亦重圍の中に陥りて、出づるに道のあらざれば、今は早これまでとや思ひけむ、乗りし白驢に策ちて敵中に驅入らんとするにぞ、手の者十餘騎前を遮り留め、三人は其場にうたれけり、麻哥末聲高く嗚呼同胞、孤はアブダラの子ぞ、孤こそ天神の使徒なれ、起てよ人々、救へよ天神と繰かへしく呼はれば、叔父アブ、バスも山も谷も響けとばかり大音に神詔を誦じぬるにぞ、迹足となりし味方の軍之に勵まされ、聖旗の下に取つて返へし、此處を限りし血戦し、遂に同盟軍を打破りぬ、いでや此勢をな抜き、そとて麻哥末は懸軍長驅、默加の東廿四里に在るタイア市を圍みぬ、時に攻城の術に精しき一部民來り投じ、破城槌等諸種の器械を献せしかば、麻哥末はいたくよろこび坑夫を役して地を穿ち、壘壁を破りて城に入らん、とす、城兵力め拒ぎて之を退け、城に

嬰りて堅く守る、ここ二旬に及びしかば、麻哥末も力盡き、甘言を以て衆を慰撫し、神命と稱して圍を解きて退きけり、されど此役うるどころ甚多く俘囚六千、駱駝二萬四千、羊四萬、銀四千オンスに上りしかば、部下の將士も効空しからぬを悦びけむ、然るに軍還りてエサナに至りし時、麻哥末はハワサダ人の請を納れて、悉く其囚虜を放釋し、其將マレクに百頭の駱駝を贈りて、イツラムに歸依せしめ、且つこめてユレイシ族の心を攪り、アブ、ソフ、ファンには駱駝三百、銀二十オンスを贈りしかば、初より教主に従ひて、戦陣の間に馳驅せる默思那、默加の肱股心腹の徒は、教主の賞功平ならざるを刺り心竊に快こせず、麻哥末より慰めて曰く、金錢物品をば渠等には與ふるなれ、我命運をばあけて汝曹に托せるものを、汝曹は我流竄中の友、我國家の友たるのみならず、寔に



また我天國の同伴ならずや。衆心すなはち釋く。麻譚末それよ  
 り黙加にゆき、オタブを奉行に擧げて市政を視せしめ、マアドを  
 教長に擢んで、宗務を掌らしめて、默思那に還りぬ。  
 時に羅馬帝ヘラクリスは再び南征の師を興し、志利亞を助  
 けて將に亞刺比亞を圖らんごす。麻譚末直に兵を出して之に應  
 ぜんごせしに、諸將多く事の利なきを慮り、或は軍資の欠乏を訴  
 へ、或は馬匹の不足を述べ、さては兵糧の繼がざらんを論じて之  
 を諫め、遂に時方に盛夏軍を行るの節に非ずごて出征を拒めり。  
 麻譚末叱して曰く、胡ぞ暑を恐れん、知らずや、地獄の火は更に酷  
 烈なるをこみづから白旗をこり歩騎三萬を將て北征の途に上  
 り、熱砂を踏み瘴氣を冒して進めば、將卒渴に苦み暑を患ふる者  
 多く、志利亞に入りタブクの茂林に達して到底勝算なきを知り

初て師を班へす。獨りカレンドの威名は夙く北方に轟けるを以て  
 紅海よりエウフラタスに至るの間、諸方の酋長君主風を望みて  
 來り投ずる者尠からず。此を見て、タエフも亦麻譚末の再擧して  
 來り伐たんごを恐れ、使節を遣はして三ヶ年を期してイスラ  
 ムに改宗せんご其間、舊來の神像崇拜を許されんごを請ふ。麻譚  
 末斷然之を斥けて曰く、一月も不可、一日も不可、一時も不可。使  
 節左らば新しき教を奉ずべきに、唯祈禱をゆるし玉へ。嘆願せ  
 しも、麻譚末は祈禱なくして、宗教に何の利益かある可き。と言ひ  
 て、遂に其請を聽さざりしかば、使節も術盡きて還り、タエフは偶  
 像を破却して、イスラムを奉じぬ。  
 是に於て、麻譚末はアブ、ベケルを黙加に遣はし、駱駝二十頭を  
 屠りて、方石殿に天神を祀らしめ、アリーに命じて、コーランの末



編 パラトを宣布せしむ。パラトは四月を期してイスラムを奉ずるか貢献を進むるかの一を撰ばしめ、若し期に至りてなほ異端の説を棄てざる輩は悉く之を斬る可しとの命なり。然も幾もなくして、若し能く前非を悔ひて祈禱をなし祭壇に拜せば悉く同教の徒と見做すべしとの令を下せしかば、當初はたゞ勢に屈し威に恐れて假に神教に皈せし儕も皆眞の教徒と見なされ、諸方の君民も亦皆先を争ひて使を默思那に遣はし教主麻訶末に謁して其教を奉ぜんと請ふ者引きもきらず、歸依者の數は宛然に椰子の林に風吹きて波斯棗の落ち散るよりも似て、紅海の濱、大洋の濱より波斯灣頭に至るまでまた麻訶末の名を唱へざるはなく、天神を仰がざるはなきに至れり。

第八 入滅

默加の豫言者が傳へしイスラムの聖教は今や亞刺比亞半島を風靡しつくして海外に及び、天神の威徳天下に洽きエル、ヘシラの第十年に至り、教主麻訶末は大に國中に令して默加參拜の大儀を擧ぐ、四方傳へ聞きて來りて其行に加はる者多く、其數實に拾壹萬四千餘人に上れり。教主麻訶末はまづモスクに籠りて祈念をこらし、駱駝に騎り出でて、バイダの原に及び、天神に讚辭を捧げ、ゆきくして方石殿に達し、天降の黒石に接吻し、堂を廻る。ここ七回、去つてアルサフ、崗上に天神唯一の頌を誦し、メルワンの崗より、メナの谿に下りて夜を明かし、翌日拂曉再び方石殿に賽し、復メナの谷に赴きて七石を投じ、年齢の數に應じて六十三



頭の犠牲を屠り六十三個の奴隸を解放し、ゼゼの聖泉を飲みて  
祈禱をなす。此の如くすること九日にして、参拜の儀式全く畢り  
しかば、最後に令して曆法を改定し、太陰曆を用ゐ、潤月を廢し十  
二月を以て一年となし、古來亞刺比亞人が慣用せる四聖月を停  
めたり。

翌くればエル、ヘシラの第十一年回々教主麻訶末は嚮にしは  
北方を征し毎に志を得ざりしを憾み大に北征の師を興し、  
宣教第二の徒弟ゼイドが怨を呑みて異域不祀の鬼となりしを  
愍み、其遺子オサマが年紀僅に二十歳なるを擧げて總督に任じ、  
自出で兵を觀備にゼイドが北伐の偉功を述べ、オサマを將と  
なすは其在天の靈に報ゆる所以なれば上下心を一にして善く  
征伐の効を奏す可きを説き親しく神旗をとりてオサマに授け、

直にムタに出で、志利亞を侵畧せしむ。征軍即發す。

その夜麻訶末は忽病を獲、頭呻々として痛耐え難く、切りに譚  
語を作して昏夢しはく、驚く夜半に至り、決然禱を蹶りて起ち、  
一蒼頭を呼覺まして後に從へ、家を出で、城外の塋域に至り、天  
を仰ぎて大に死者の閑寂靜淨にして幸福なるを頌し、徐に蒼頭  
を顧みて、時盡き歡極まるの日を現世に數へん歎はた天神の樂  
土に歸らん歎、我は後者をこらんのみこいひて家にかへり、是よ  
り遂に禱裡の人となりぬ。

是よりさき三年麻訶末年齢六十にして猶太人の根據地カイ  
バルを陥れ凱旋の宴を張るや一婦人、羊肉に毒を和して進む。麻  
訶末之を食ひ忽毒あるを知りて肉を吐きしも、老軀年と共に漸  
く衰へ、此に至りて病み、身熱して火の如く水盤に水を盛りて五



體を冷せども及ばず曰く「噫、我今にしてカイバルの毒に中れるを知る」  
を知らして悔恨措かず而も病少しく間あれば祭壇に上りて祈念をこらして懈怠せず教の爲に斃れ道の爲に殉せし幾多の戦士が冥福を脩し又默加の隨奔者を誠しめて默思那の歸依者と争ふことなく互に心を一にし功を合せて異端外道の徒を亞刺比亞以外に追逐す可しと説きぬ斯くて病痾日に革まり行きて遂に衆を見る能はず一日アブ、ベケルをして代りて教主の事を行はしむ群衆アブ、ベケルが壇上に顯れしを見て教主已に示寂せりとなし喧擾を極む麻譚末之をきよアリ、アル、アブバスに扶けられて壇に上りアブ、ベケルと共に天神に祈り祈り了りて衆に向ひ説きて曰く「汝曹我寂せりとなして喧擾せりといふ古來豫言者皆逝けり諸行は悉く神意に出で定規は皆動かし難き

を奈何せむ我は今、我を人間に下し、天神の地に歸り去らんとす去るに臨みて汝曹に告げむ汝曹互に結合し相愛し相尊び相扶け信念を固くして諸善を力めよ是人間昌榮の本源にして之に背かば廢滅せん」と又曰く「我は汝曹に先ちて逝く汝曹は我に後れて至る可し衆生皆一死唯か之を免れむ我生も汝曹の爲なり我死も亦汝曹の爲なり」と之を教祖麻譚末が最後の説教とす

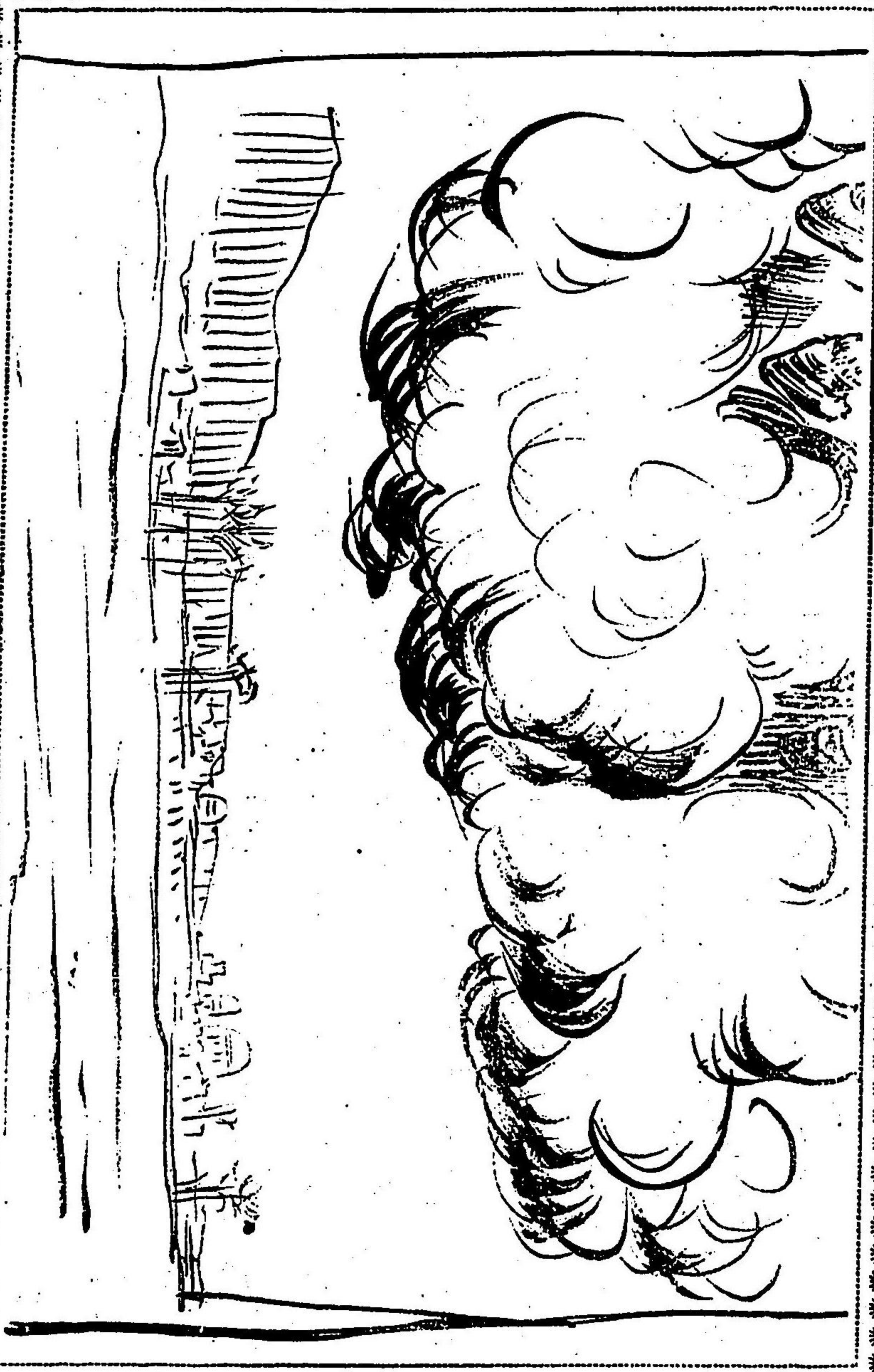
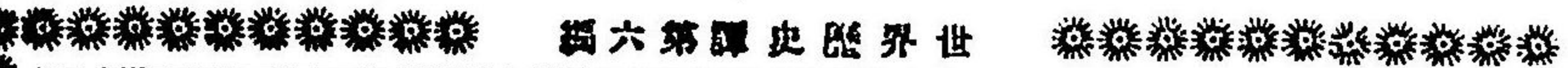
此後麻譚末復衆人を見ずたゞアリ、アブ、ベケル、オマール等互に交代して病床に侍しアエシツねに枕頭に在りて看護をなすしが一日病痾大に漸み死期將に迫らんとして自起たざるを知らず麻譚末は徐に親戚姻族の悲歎をなくさめ其奴婢二十八人を解き釋るし財貨珍寶を分散遣與し細に葬送の儀式を定む



既にして急に起ちて侍者を徴し筆硯をとりよせしめ、一代の説法を口授し聖典を殘さんとする。オマル之を見て諫めて曰く「既にアルユーランの在るあり以て教を後世に垂るゝに足れり、今病痾篤くしてなきて一代の説法を復誦し給ふべき」と然るにまた「否」とよ、師の意に任せて神示の聖典を遺さばや「な」といふ者ありて忽地一場の議論を惹起し、甲論乙駁頗る喧囂を極むるにぞ、麻譚末命じて悉く之を退け、靜に夫人アエシヤの膝に枕し、手を水盤にひたして自面を洗ひ了り、昏々としてまた人事を辨ぜず、忽又眼をみはりて上天を望み、噫、天神、我罪を赦せ、然り、天上樂苑の裡に……」幽につぶやくよと見えしが、ブリエールが遣はし、司命の使者に誘はれ、溘焉として雄魂長へに第七天界に昇り去りぬ。こゝに至りて病褥に在ると、前後十四日、年紀六十三歳、時はエル、へ

シユラの第十一年、第十二レビイの第一日にして、基督紀元六百三十二年六月八日に當り、皇朝にては舒明天皇四年、支那にありては唐の太宗の貞觀六年なり。  
是より先、北征の大軍、默思那を發し、行くこゝ里餘ヂルフに抵りて、教主の病を聞き、進まず、こゝに至りて、訃音を得て、オサマ忽馬首を回へして歸り、神旗を麻譚末の殿前に立つれば、諸將帥皆こゝに馳せ集ひて、混亂殆んど名狀す可からず。或は「教主は決して永眠せしに、あらず、見よ、將にモーゼス、基督等の如く蘇生らむ」と言ひ、或は「天神の使徒を葬る勿れ」と呼び、或は「豫言者は入滅せず」と叫び、オマルの如きは、劍を抜き、眼を瞋らし、教主死せりと言ふ、不信の徒は我誓つて之を斬らん」と喝破せり。既にしてアブ、ベケル外より入り、徐に諸人を制して曰く「諸卿は天神をや信







ぜる、はた教主をや信ぜる、教主が仕へし天神こそ永劫不生不滅  
 なれ、教主は寔に人間なれば、何ぞて一死勿らんや、聖典の語を  
 引き、教主の言に據りて其誤れるを説き示せしかば、衆漸く服し  
 て生死の問題はじめて決せり、而るに之に次ぎて葬地の紛議は  
 起れり、默加より來りし信徒は、教祖降誕の地なれば遺骸は宜し  
 く默加に葬る可しと論じ、默思那の教徒は發祥成業の地なれば  
 默思那こそ豫言者が坐域なれと主張し、互に相争ひ遂に事を干  
 戈に訴へんとするに至りしかば、アブ、ベケル復之を調停し、教主  
 はつねに其瞑目示寂せし地に葬る可しといへり、さてすなはち  
 殿中臥床の下を穿ちて麻罽末の遺骸を葬りぬ。  
 回々教主麻罽末は今や妻妾を捨て珍寶を捨て、新に建てし帝  
 王の遺業こそその大版圖を捨て、新に興し、イスラムの聖教と

その教徒を捨て、猛鷲の翼流星の眼、金毛鐵蹄の神馬アル、ボ  
 ラツクに跨りて、白雲を踏み絳霄を驅りて遠く第七天界に昇り  
 ゆきぬ、清泉甘く椰樹青き亞刺比亞の默思那は、茲に其遺骸を収  
 めて教祖終焉の靈蹟、聖墓の神域として、默加と其名を等しくし、信  
 徒千里を遠しとせずして四方より詣で、天に就かず、地に墮ちず、  
 自空際に浮べる聖棺神槨の不可思議に喜隨渴仰の感涙に垂れ  
 て星移り物變りし千歳の後の今もなほ尊信益熾に當年の威靈  
 を仰げり。

第九 神蹟

抑宗教的偉人に伴ふものは神異の事蹟にして、彼印度の大聖  
 釋迦の如きも、彼猶太の神子基督の如きも、靈妙不可思議の傳説



を有せざるはなく、或はまた其不可思議は傳法弘教の最好方便  
 となりけむも、亞刺比亞の豫言者麻譚末に至りては異なり、彼は  
 靈異不可思議の力よりも更に有力なるブル、フ、カール以下四名あり、アル、バツタルあり、メッドハムあり、ハテフありて、太阿龍泉に優れ  
 る利劍の利は彼モーゼズが靈杖よりも利く、活人殺人の銳鋒は  
 能く一代を風靡し、紫電流星の光芒は長く千歳を照らして、アル、  
 コーランの教を傳へしかば、故に神靈怪異の力を要せず、嘗て默  
 加の民が渠に迫りて、天使を降せ、默示を爲せ、砂漠の中に花苑を  
 顯せ、不信の市街を天火に附せよ、モーゼズの如く基督の如き豫  
 言者の自在力を証する爲に不可思議を示せと云ひし時、寔やセ  
 ーゼスは不可思議を示せり、而も其結局や如何、フ、ラオは其不可  
 思議を蔑視し、其人を罪し、其徒を逐ひたるに非ずや、不可思議の

弊此の如き、卿等何ぞ此不祥の事を求むる、神異の示顯は好奇の  
 心を動かさし、不信の念を招くにすぎずして、天神の禁誡する所な  
 り、況や我は神の使徒たる人間なり、何の不可思議をか爲さむと  
 罵倒せり、故に教徒も亦教主の心を以て心となし、信仰の範圍に  
 安んじたりしも、なほ庸劣不識の徒多くして、之に甘んぜず、教主  
 を神異靈物たらしめんが爲に、幾多の不可思議を附會假托し、年  
 處を経るに従ひて、神話異說漸く多く、遂に一大神蹟を後世に傳  
 へたり、彼降誕の日の神異、漢中の不可思議の如き、皆是なり、然り  
 と雖も、神蹟は神蹟として傳へざるを得ず、今こゝに其二三を舉  
 げむ。  
 曰く、教祖嘗て默加に在りし日、諸教諸學に通曉せる賢王アピ  
 ブ、イブン、マレクなる者あり、齡已に一百四十歳、其公主嬋妍花の



如きも不幸にして盲にして聾啞にして跛なりしかば、王深く之を悲み、衆二萬を従へ、來りて方石殿の神に禱る、アブ、ソフアン、アブヤール等王の手を假りて教祖を失はんご欲し、往きて王に謁し、豫言者が民を惑はし國を亂すを訴ふ。王乃大に衆を會し、紅帳を張り、鏤金の榻に凭り、威儀を盛にして、教祖を徵す。教祖は素衣を着、紅衣を被りたるアブ、ベケルに導かれて至りて王を見る。王徐に問ふて曰く、衆皆卿自天神の使徒ご號すごいふ、果して眞歟。教祖曰く、然り、洵に此事あり。天神我を人間に送りて天意を傳へしむ。王曰く、可矣、然らば問はん、古來豫言者は皆神異奇蹟を示せり。ソアに虹霓の靈あり、ソロモンに輪環の異あり、アブラハムはよく竈下の烈火を冷ならしめ、アイザックは羊の命に代るあり、またモーゼスは不可思議なる節杖を有し、彼耶蘇基督に至りては

死者をして蘇生せしめ、言下に天風を起せり。知らず、卿は何の妙術異法ありて自豫言者ご號するや。教祖從容ごして曰く、我王の好む所を爲さむ。王曰く、我帳中に在るは誰ぞ、はた何の故に此に至りしやを知れりや。教祖地上に畫してトし、應へて曰く、殿下帳中に伴ふ所は公主サチアにして、盲にして聾啞にして跛なるを天神に禱りて治せんが爲に至れり。請ふゆきて公主に聽きて、神力の偉なるを知れ。王帳裏に入り見れば、公主蓮歩を移して、迎へ、明眸清く、朱唇善く語る。王驚喜し、更に教祖をして試に、天日を遮り、太陽を招かしむ。教祖命を領して一喝すれば、一朵の黒雲來りて、太陽を蔽ひ、太陰漸く下り至り、方石殿をめぐり、教祖ご語り、忽焉其形を變じ、頸上より衣裏に入り、裾下より逸脱し去れり。王アビブ大に之を異ごし、遂にイスラムの信者ごなれり。ご



又曰く、樹木も教祖を迎へんが爲に行けり、岩石も教祖の前に叩首せり、教祖の指頭よりは清水湧進し、教祖の力によりて饑人は飽き、病者は癒え、死者は蘇れり、梁桁教祖に向ひて哭し、駱駝教祖に對して語り、羊骨教祖に冤を訴へたり、有情非情の差別なく、覆載間の森羅萬象一として教祖の指頭に應ぜざるはなかりき。

斯の如き靈異を傳ふる一にして足らず中に就きて最不可思議なるは教祖が七天界に遊行せし神蹟にして、渠嘗て遊行を夢み、覺めて其靈異を語りしより、其徒解して實に此神遊ありしことなしとなり、而して此神遊談はアエシ以下六人各其所傳を異にす、今渠等が傳ふる所を綜合すれば所謂七天界巡歴の神蹟は概次の如し。

教祖麻訶末一夜方石殿裏に在りしに、五百の翼に泊夫藍麝香の香囊一萬を懸し、白髮皓面の天使ガブリエルに下降し、神劍を脱きて教祖の胸腔を割き、金盤に盛れる聖水を汲みて其心を洗滌し、騾より小く驢より大にして鬘に眞珠寶玉を飾り、眼は流星と輝き、人面にして人語を解する神馬アル、ボラックを牽來りて教祖を乗せ、先づ馳せてシナイ山に登りて祈禱をなさしめ、更にベスレヘムに至りて復祈禱をなさしむ、祈禱畢りて天馬空を翔る時、忽聲ありて教祖を呼ぶ、行くこと少時にして復教祖を呼ぶ、最後に美人顯れ、玉手を延べて教祖を抑留せん、とす、教祖皆顧みずして過ぐ、ガブリエル曰く、若し第一聲を聞きて留らば卿が民は猶太教徒となりしならむ、若し第二聲を聞きて留らば卿が民は基督教徒となりしならむ、若し彼婦人に聽きて留らば卿が民



はみな現世の快樂に耽りて永く地獄に墜落せしならむ。斯て  
 エルサレムに達すれば、一個の人あり、水、乳汁、酒を盛りし三瓶を  
 齎し來りて教祖に進む。教祖その乳瓶を受けて之を飲む。ガブリ  
 ール曰く「卿乳汁を飲みしが故に卿が民は皆正道に歸せむ」と。此  
 に至りて忽看る彩雲縹渺たる際一條の黄金梯子ありて降るを  
 二人之に攀ちて先づ第一天に昇れば、此天は是純銀界にして、黄  
 金鎖を以て星辰を列張し、各星皆天使ありて之を守護す。中に就  
 きて大鷄王あり、其頭は高く第二天に達し、其翼雙は紅寶珠玉を  
 つらね、一聲鳴けば天下の群鷄之に唱和し以て地上に曉を報ず  
 る。といふ。教祖はこゝにアダム、イヴに遭ひ次に第二の煉鐵天界  
 に至りてノアに逢ひ、更に進みて第三天寶玉界に昇りて、司命神  
 アツラエルが天冊の上に生兒の名を記し死者の名を削るを見畢

りて第四の白銀天界に入れば、現世の人間の罪障惡業を悲みて  
 流涕滂沱たる泣神あり、教祖此天に於てヤエブの子ヨセフに遭  
 ふ。第五天の黄金界にハア、ロン居れり。斯て教祖は第六天の紅  
 寶玉界に半身を雪、半身は火なる天地守護神を見、モーゼスに謁  
 し、終に第七天なる壯嚴美妙の大光明界に達すれば、人皆長軀大  
 幹各七萬の頭顱あり、每頭七萬の口あり、每口七萬の舌あり、每舌  
 七萬の聲を作す。教祖茲にてアブラハムと語り、更に進みて蓮葉  
 樹下に至れば、樹梢天地に擴かり、葉は香象の耳朵に似て、實は水  
 瓶の如く種子に各一位の天女あり、無數の禽鳥梢頭に囀り、無量  
 の神使樹蔭に憩ふ。此よりさきは天使ガブリールも尙至るを得  
 ざる所にして、獨教祖至るを得可し。よりにて教祖先づ大光明海を  
 渡り、次に大黒海を過ぐ。天外忽聲ありて「麻哥末近く進め」と呼ぶ。



教祖乃一步を進むれば人界五百年の旅程を過ぐなほ呼ぶと二度教祖又二歩を進むれば脚下の天高くあがりて直に天神の玉座に近き光明赫耀仰ぎ見る可からず天神乃教祖を幕裡に引き一手を其胸上に加へ他手を其肩上加ふれば寒光骨に徹し芳薫四周に満ち快感言語に絶す教祖玉座の上に神劍あるを見その民を害はざらんを乞へば之を汝に授けむ汝の民は此劍に害はるゝなしと宣り玉ひ教祖また前哲に與へし如き若干の特典を賜はらんを乞へば之を讀まば悉く現世にて要するものを得可く未來に於て必ず天國に生るべしとてアル、ユーランの二章を授け玉へり教祖さらに其教徒の罪障を特赦されんことを乞へば七千人を赦さんと宣り玉ひ尙其數を増さんことを乞へば天神壺中の微塵砂を握りて空中に撒布すること三度にして

「此砂塵の數に均しき汝の教徒を救はん」と誓ひ玉へり斯くて教祖は日毎に五十回の祈禱を捧げんと誓ひて退きしが、モーゼスの爲に其多きに過ぐるを教へられ更に天神に見えて毎日五回の祈禱を約し遂に下界に歸り來りぬ。  
是頃刻の間に靈境神域の秘を極めたる回々教祖麻譚末が天界巡歴の異蹟なり。

第十 人ご教

斯の如くその教徒の間に神蹟異傳を残したる回々教祖麻譚末はそも如何なる人ぞといふに、身幹中材にして頭顱大に毛髮美しく隆準にして爛眼、口大にして鬚髯長く、兩肩の間に黒痣ありて其大さ鳩卵の如し其平常の動作を見れば偉人もご粗笨な



らず英雄由來細心の徒多く、天神の使徒、人間の教主を以て居る麻譚末も敢て賤務を執るを厭はず、親火を焚き床を掃ひ乳を搾り履を繕ひ衣を縫ひ、大麥の麵包、羊の乳、蜂蜜を嗜めども、多くは水を飲み波斯棗を喫するのみ、飲酒はもとより嚴く禁ずることにて、嚙遊の日にあらざれば、時として厨下の爐、火氣なきもの數日に及べりといふ、而して其行事に至りては磊々落落々其心に動くところ其行に發し、推辭せず自屈せずまた尊大踞傲ならず、事に臨みて遲疑せず、變化多き一生を通じて毫も哀聲を爲さざりき、此を以て時機迫る時は殘忍暴戾も公々明々に斷行して憚らざりしも、また憐哀の情寛容の度他人の及び難き所あり、而して其最他人の至り難く、企て難きところは確信自任の強きに在り、渠はアル、コーランの中に「確然」の一語を以て一章を爲せるも

の多し、まことに此確然なる自信は渠が人界靈界に此の如き偉業を成就せし標識たらずんばあらざるなり。而して此天真爛漫多情多感なる偉人が眞面目を傳ふる者は所謂天來の聖典アル、コーランなり、其宗教は則王國なるが如く、コーランは經典たると共に政典法規なり、然らばコーランは何如なる書ぞ、天神玉案に凭り光焰の靈筆をこりて恒常不易無始無終の神意を誌せし一卷の神書天上に在りしを神使ガブリエール齎らして月界に下り、ヘラ山中に於て書中の意を麻譚末に傳へてより、後年毎の聖夜此母書の默示を得て編みて一卷の經典を成すに至り、讀誦の義によりてアル、コーランと名く傳ふ、しかも實に是教祖麻譚末が十餘年の説法に天意神言に假托し機に臨み變に應じて論じ來り説き去りし訓誡寓言命令の斷片を



其教徒が椰子樹葉に羊の胛骨に記録して匣底に藏めたるを教祖の入滅後オマルが取捨編纂してアル、ソハフといひ、次ぎて名士ホドハイフ、ハリ發オトマンに勸めてコレイシ族の所藏せる古典に参照輯成してコーランとなし、ものなれば、其記すころ一として麻訶末が情思想の發現ならざるはなし、従つて全篇を貫くの秩序なく、前後を連ぬるの關係なく、經典は次ぎ來る章によりて其意を正す可しといひ、コーランは七の形にて現るご説きしも、其各章各篇は自千古不磨の至言にして寔に永劫不易の眞理を含めり、況や絶代の偉人が至精至純の熱誠を以て熾ゆるが如き满腔の熱血を濺ぎし有韻の神言は、所謂天神にあらざればいふ能はず、豫言者にあらざれば傳ふる能はざる、豪宕雄渾稀世の名篇として亞刺比亞人を感奮興起せしめしや大なり。

故に一卷のアル、コーランは上國家の大典より下閭幃の瑣事に至るまで悉く教徒の云爲を指示規定し、西は太平洋の波靜なる濱より東は亞細亞の山深きところに至るまで戸絃家誦せられ、教祖麻訶末が天來の意想は長へに傳はりて今尙億萬の教徒が口に上れり。

そもく麻訶末が此一卷の經典ご彼一口の利劍ごによりて唱道傳播したる回々教は猶太基督兩教より出で、而も兩教ご異なる所殆ご若干もあらざれば、ごさらごに其教義を述べし、ごは天地唯一神ありて麻訶末は其豫言者なり、ごいへる單簡なる信仰の外、其教徒は論ずる所なく却て重を宗教的實踐に置けばなり。

然れども今試に最簡明に回々教の信仰をいはゞ六條にすぎ



ざるなり第一に唯一神を信ず可く、多神を信じ偶像を拜する者  
 及彼三位一体を説く基督教を排せり、第二に諸種の天使を信ず  
 可く、第三に聖典を信ず可し、聖典は天神嘗てアダム、セト、エノク、  
 アブラハム等に默示せしも、佚亡して傳らざれば、たゞ現存せる  
 モゼスのペンタツク、ダビッドの聖詩、耶蘇の福音書、麻譚末の聖典  
 を信ず可く、就中コーランは最完備大成せるを以て、年處久しく  
 して誤謬を生じ、缺漏を生ぜるモーゼス、耶蘇等が聖典を補正す  
 可し、第四には豫言者を信ず可く、第五には蘇生と天裁とを信ず  
 可く、而して最後には恒常不易なる天意神命は堅く信仰して分  
 毫も疑を容る可からずとなせり。

此六條の信仰と共に麻譚末は、祈禱を爲さば、半天神に近づく  
 べく、斷食をなす者は、神殿の前に達すべく、施與を行ふ者は、神殿

に入るを得可し、三事の實踐を命じ、默加巡拜と併せて、回々  
 教徒の四行事となせり、祈禱は、まづ雙手、顔面、身體を洗ひ、淨め、或  
 は佇立し、或は跪坐し、或は葡萄し、眼をケブラに注ぎ、て、曉天、正午、  
 午後、暮天、初夜の五回に行ふこと、今に至りて廢せず、而して、毎週  
 の金曜日、は一般の祈禱日にして、教徒は皆、モスクに集會し、イマ  
 ム壇上に立ち、て、祈禱、説法を爲せり、肉食、帶妻、睡眠を、信徒に、禁じ、  
 懺悔、苦行、難業を、強ゆるを、非とせる、麻譚末も、尙ほ、天神と、教主に  
 敬意を表する爲に、教徒をして、毎年、三十日間、斷食、齋戒して、心神  
 を、清め、身體を、修練せしむ、こゝを、以て、回々、教徒は、ラマダンの月  
 の、間、日出より、日没に至るまで、飲食、男女の、慾、沐浴、薰染の、快を、斷  
 ち、強健を、來す、榮養と、快感を、與ふる、愉樂とを、嚴禁するを、以て、熱  
 地、暑天、一滴の水なほ、咽頭を下す能はず、また、麻譚末の、慈善は、動



物の上にまで及び、コーランの教は凌辱を受け不幸に沈淪せる輩を救恤するを義務となし、個人の所得は財貨、家畜、穀物、商品、問はず、種目の別、斤量の多寡を分たず、必ず収入の十分の一を以て恤救の費に充てしめ、若し哄騙の輩は贖罪のため五分の一を收む可しとなせり。

斯くて此信條の行事には賞罰の附帶せるありて、之を決するが爲には最後の天裁神判あり、其説によれば基督教徒、猶太教徒、拜光教徒以下諸の偶像信者は層々深地獄に沈淪し、最深き無間地獄には宗教の假面を蒙りたる無信仰の偽善者沈むなり、斯て現世の人間の大部分は其信教の差によりて罰せられて後、獨りイスラムの教徒のみは、其現世の行爲如何によりて宣言を受け、悉く善悪邪正の功罪を比較商量し了りて、地獄の深淵に架し

たる危橋を渡らしむ。此に至りて清淨無垢の身は教祖の足蹟を踏みて無事に彼岸に到達し、直に天國樂土に入り得可く、罪業ありし者は皆踏み外して橋下の深淵に陥没し、七地獄の最中なる第一地獄に沈淪し、短きは九百年、長きは七千年間、其界を逸脱するに依りて諸の罪障消滅し、永劫の苦艱を免るを得と謂へり、而して教祖麻哥末が酷熱炎暑の亞刺比亞に於て、天國樂土を説きて、緑樹蔭深く、清泉水甘き美地となしたるは、人情の自然に出で、教徒の心を悦ばしむるに最力ありしならんも、更に一步を進めて、凡俗庸劣の野人を懐くる爲に、眞珠、金剛石、黄金、砂羅綾の衣、大理石殿、さては天上の美祿、人間の珍味、幾多の侍、堅妻、婦等總べて、肉慾を満たす奢侈驕華を盡くして、情天慾界を説きしかば、教敵



不淨汚穢を以て之を誇り、教徒も亦或は象形比喩なりとして之を排したり。然りと雖も、鼓角一吹して天使、天魔、人間、皆死者の中より起り、人心は再人體と抱合して新世界を作る。復活の説を認め、非情の塵埃土芥を蘇活し、形象なく體質なき無量数の原子を集成する。造化の自在力を説く以上は、また精力の生存を認めざる可からず。従つて智力と相待ちて始めて人間の幸福を完成し得る。肉慾の存在をも認めざるを得ざるなり。況や麻譚末が説く天界の快樂は、獨り富貴淫樂に留らずして、天神の冥福を享く可き聖徒、殉道者は、あらゆる卑陋なる快樂を排除す可しと説きたるを、これを以て強て麻譚末を罪せんは、また不通の論たるのみ。

然らば或はヘラ山中の隱者として、或は默加の豫言者として、

或は亞刺比亞の征服者として、さては回々教の始祖として偉傑麻譚末が生涯の功罪は、そも如何、彼天來の福音冥想の靈機に觸れて唯一眞神の存在を認め、渺たる一介の身を市井の間に起して、たち幾百千年亞刺比亞が未曾て聞かざりし新しき教を説き、宗祖傳來の舊想を打破せんこの大志を立て、ヘラの洞窟を出でし麻譚末は、想ふに至純至誠の宗教家たりしならむ。しかも狂熱と騙欺は、相距ること遠からず、聖賢豈自欺き他を騙かんや、而もソクラテスも神を説けるは何ぞや、かの頑迷固陋の徒は、服し難く信じ易からず、單に新説を拒むのみならず、却つて其人を害せんとするに至るが故に、教を立つる者は、教の爲に方便をつくり、道を行ふ者は、道の爲に權道を啓かざるを得ざればなり。此を以て法を默加に説き、曩日の聖師は、劍を默思那に磨ぐ、後日の



英雄となり、慾界の繋縛を斷つ利劍を翳して不信の外道を屠り、弘教傳法の爲に荆棘をさき草莽を拓きぬ。假令其晩年の事業は殘忍酷薄の誹を免れずして、世人をして唯滿腔の野心を見てまた當年教法の爲に捧げし信念を疑はしめしと雖も、此時此境に處してその天職を盡くす爲には誠に勢已むを得ざりしなり。假令麻譚末は狡獪偽善の老爺にして、其教徒の信仰堅固なるを見て窃に我業成れりと言ひ冷笑せりと言ひ罵倒する者あらむも、彼が利害と教とは纏綿離る可からざるものなれば、其徒の信仰と其師の成業とは共にイスラムの教を立つる所以のみ。又假令渠が立し教の根底は既に古哲前聖の説きし眞理信條に過ぎずと貶す人ありとも、天神の威靈を説きて阿刺比亞の偶像を打破し、祈禱齋戒救恤斷食を以て犠牲に代え、天堂地獄を示して卑俗愚蒙を

さとし、此時に適し此國に適せる新神教を起し、功は豈大ならずや。渠が騙詐老獪をいふ者は、其女俘を賣るに母子を共にする一片の至情を想ひ、渠が救世の効果を疑ふ徒は、獨亞刺比亞國民といはず、イスラムを奉ずる教徒が如何に今日あるかを視よ。若し組織の完備せる道義政治を亞刺比亞國に建設せんことは、麻譚末の或は能くせざりしところならんも、眞率の中に仁慈の情をこめて公共道徳を奨勵し、教義法令を定めて殺伐報讐の風を禁じ、鰥寡孤獨を恤救し、反目疾視相鬪ぎし諸部諸邑を連結し、専ら力を外に用ひしは、豈麻譚末が現世に於て亞刺比亞の爲に盡くし、功ならずや。假令對外の力大に過ぎ、國運の進歩速にすぎし爲め、故國の主權は早く失せ、故國の民は東西に散じ、哈利發の朝は早くナグリスの岸、ダマスクスの谷に移り、神聖の故都舊邑



は復争亂の巷となりぬるも、サラセン帝國の勢威は赫々として長く青汗を照すに至りしもの、豈麻訶末が人間に於てサラセン人の爲にたてし偉業ならずや。

然りと雖も、赤誠を吐き熱血を濺ぎし説教に幾多の民衆を教化せしは深く驚くに足らず、古來一宗の教祖は皆能く之を成したればなり、身を市井の間に起し、孤劍に杖りて故國を定めしも亦大に異とするに足らず、古來の英雄風雲に際會すれば何れか斯の如くならざるあらむ、獨り麻訶末は全然相背反せるが如き説法と干戈とを連結し、武辯の二者を並び用ゐ、熱誠と畏怖とを相助け相補はしめ、各種の障害を打破し、亞刺比亞人の放恣不羈の情を現當二世に擅にせしめて、豫言者の尊信を致せるは則偉人の偉なるところなり、麻訶末の滅後、教義に關して諍論起りし

も、こゝには法權と俗權と掌握して神人の二界を合せ治むる、哈利發ありて、身は豫言者の後嗣にして、また信仰の標識たれば、凡て宗義上の革新を排除し、法典の博士は則アル、コーランの神訓を守れるを以て、基督教に於けるが如く新説の民を惑はし異議の國を案するの患は無く、神の萬能自在力は決して凡眼に見て象り得可きものならず、豫言者の事は決して凡智の測り知る所にあらずと信ぜる回々、教徒は唯我は一神を信ず、麻訶末は其豫言者なりと謂へり、誠や諸宗の教祖宏深遠の教を立つるも、時選り世易りて流轉弘通の間久くして、末法の徒が所信は遙に祖師の所説と違ひ來りぬ、試に印度の大聖をして東海の佛刹を覽せしめ、聖彼得聖保羅をしてワチカンの神殿を訪はしめんには、こもに其教の變遷に驚かむ、然れどもひとり土耳其の聖ソファアの



殿堂は豫言者が手づから黙思那に作りし小宇に異ならずして、千載の上麻譚末が亞刺比亞の民心に鼓吹せし無垢純潔なる信念は千載の下印度亞非利加土耳其其他あらゆる回々教徒が抱ける信念と毫釐の差異なきを見れば、渠が教の宣傳弘通の大なるよりも渠が教の恒久不易なるに於て古今比倫なきを驚嘆せずんばあらず。此の如きは他の教祖の得ざりしところにして洵に麻譚末が靈界の偉業を永遠に傳ふるものなればなり。

第十一 餘光

回々教主麻譚末既に神馬に騎りて天上に昇り去りぬ抑誰か之に代りて後を受く可き由來亞刺比亞人は熱國に生れ男女の情最熾に妻妾の數殆ど制限なかりしかば、麻譚末出で、四妻妾

を限りしが、渠はなほ前後數十人の婦女を養ひ、カヂエの後にアエシマ、サウダ、ヘンド、ゼイナブ、バラ、レハナ、サフィア、オム、ハビバ、マイムナの九室ありき。然れども一宗の教祖たるに共に實は堂々たる一國の帝王たる麻譚末に在りては、之を漢宮三千の女嬬に比せんか、はたソロモンが七千三百の妃嬪に比せんか、上代の陋俗素より深く咎むるに足らず。唯それ斯る數多の妻妾を擁せし教祖が血統は、猶太の婦人メリーの腹にイブラハムありしも僅に二歳にして逝き、カヂエの四男兒三女は悉く父に先だちて没し、残れるは唯アリーに嫁せしフナマあるのみ。道の爲、教の爲に盡くす赤誠熱情他に比倫なく、詩才を懷き勇武に秀て、しかも天性の聖徒たるアリーが義弟として宰使として麻譚末に仕へし。ここ恰もア、ロンのモゼスに於けるが如きものありしかば、血



統すんのいひ、姻縁いんえんのいひ、資性しせいのいひ、豫言者よげんしやの後のちを繼承けいじやうす可べき者は  
 渠かを措さきて他たにあらざるなり。然しかれども教祖きやうそが病床びやうしやうに侍まりし者  
 はアブ、ベケルの女むすめアエシヤを始はじめとして悉ことごとくアリーが敵てきなりしが  
 ば、後嗣ごうしにつきては一言いげんの遺托いたくなくして教祖きやうそは逝いき、こゝに不羈ふき  
 放恣ほうしなる民たみは忌憚きたなく其所そのところ志しを主張しやうちやうし、コレイシユはハシエムの  
 統すんを奉ほうぜんことを忌いみ、默加まつかの徒たは默思まっし那なの民たみと反目はんもくし、教祖きやうそ墳ふん  
 上じやうの土つち未いまだ乾かかざるにイスラムの教きやうは早はやや仆たれ、サラセン國こくは  
 將まさに亡なびんとするの危機ききに迫せまりしかば、オマル起たちて、何なにれの黨たう  
 派はにも關係くわんけいなき濃厚かうじゆう篤實とくじつの老君子らうくんしアブ、ベケルを擁立ようりつせり。此こゝに  
 於おて默思まっし那な、默加まつかを始はじめとして亞刺比亞あせきびや全國ぜんこく皆みな此こゝに歸かへせしも、獨ひとりハ  
 シムの一族いっしやくは服ふくせず、その主長しゅちやうアリーは私第しだいに籠かこりて自教主じきやうしゆの  
 後嗣ごうしを以もつて居ゐること六月ろくがつ、フナマ没ぼつするに及びおよびてはじめてアブ、

ベケルの主權しゆけんを認承にんじやうせり。後二年ごにねんにしてアブ、ベケル殞落えんらくし、オマ  
 ル後のちを受け、位ゐに在あること十二年じふにねんにして刺客かくしの毒手どくしゆに斃たれ、オ  
 トマン第三世だいさんせいの哈利發かりはつとなれり。彼かのアブ、ベケルの細慎さいしんなるオマ  
 ルの峻酷しゆんこくなる能よくく教祖きやうそ成業せいぎやうの後のちを受け、教國きやうこくを統治とうちし勢威せいゐを  
 四方しやうほうに張ひりしも、此このオトマンに至いたりて位ゐに在あると十餘年じゆにねん、老耄らうまうの  
 殘軀ざんきゆう、薄弱ぼくじやくの意志いしを以もつてまた治政軍旅ちせいぐんりよの重任じゆうじんを負おふ能よはず、其その璞ぼく  
 びし者は詐いつはりり其信そのしんぜし者は背そむき、天下てんか大たいに亂みだれ、クフよりボスラ  
 より埃及えがひより大漠たいはくの中なかより反民はんみん亂徒らんた干戈かんかをこりて蜂起ほうきし、默思まっし  
 那な圍ゐを受うくること四十二日しじふににちにして水斷すゐだんえ糧盡りやうじんき、城中じやうちゆうまた叛はんき  
 アエシヤの弟一隊あいつしやのていいつたいの凶徒きやうたを率ひらゐて哈利發かりはつに迫せまり、鮮血せんけつ淋漓れんりたるう  
 ちにオトマンはコーランを抱いだきて斃たれたりき。是こゝに於おて麻哥末まかま  
 の滅後めつご廿四年にふしよねんの星霜せいそうを経て、其女そのむすめフナマが夫おとこハシムの族長しやくちやうアブ、





タレブの遺子アリーは始めて回々教の主となり、驕奢浮華の弊を去り亞刺比亞本來の淳朴の美を復し、綿衣を被り粗巾を戴き默思那のモスクに出で、教徒に忠誠を誓はしめて諸方の亂を鎮壓せり。

然るに有力なる亞刺比亞の二酋長テラ、ヅベイルはアリーと善からずして默思那を脱して默加に奔り、更にバストラに奔り、こゝに反旗を翻してイラクの政府を篡ひ、オトマンを弑したる凶徒は却りて愛國尊王の假面を蒙りて起ち、哈利發の爲に讐を復せん。と揚言して麻罽末の未亡人アエシヤは其軍に投ぜり。アリー乃親二萬九千の大軍を率ゐて之を征す。叛軍は敬虔の信念を振作する爲にアエシヤを陣頭に擁してアリーの軍を邀へしが戰遂に利あらずしてテラ、ヅベイルは戰場に斃れ、アエシヤが駱駝を御



せし七十卒は悉く斬られ乘輿を貫く投槍飛箭蝟毛の如く、主は敵手に落ちて默思那の古第に送られ再び教祖の墓側に仕へぬ。時にアブ、ソフアンとヘンダの間を生れしモア井ヤは哈利發オマルに撰ばれて志利亞の政を視ること茲に四十年、勇幹才畧なきも仁慈の名を博して民心を收攬し、血痕點々たるオトマンが最期の衣をダマスクスのモスクにかゝけて自哈利發の尊號を僭し部下に忠誠を誓はしめ、埃及の征服者アムルと聲援を通じ復仇報讐の名を假りてアリーに叛く。アリー既にボストラを陥れ進みて之とエウフラテスの西岸シフインの廣野に會し、相持すること一百十日、鋒を交ゆること九十回、敵の死者四萬五千にしてアリーも亦二萬五千の大兵を失へり而も此戰場にてアリーの働こそ目ざましけれ、渠は其部下に向ひ、敵懸らずばな進みそ、



逃る敵とな追討ちそ、女囚をいたはれ、死者をな辱しめぞ、嚴しく令して、白斑毛の駿馬に跨り、雙刃の利劍を舞はし、一敵を斬る毎にアラ、アクバールと呼び、一夜の戦に、其雷聲をきくこと四百回に上りしこそ、さればモア、イヤも殆んど遁れ去らんこそ、しが部下の力戦によりて、捷利を得、アリーは怨を呑みて、クフに退き、百兒士亞、エーマン、其他の諸州は皆、狡猾なるダマス、クスの僭主に應じたり、此を見て、窃に默加のモスクに集りし三個の刺客あり、教國の安康を復せん爲に、各劍を懷にして去り、先づ埃及の副王アムルを刺して中らず、次にダマス、クスの僭主モア、イヤを刺して、傷け、最後の一人は、哈利發アリーを刺して、之を斃しぬ時に、アリーは年紀六十三歳なり。

權勢の争は其國其時に終れども、宗教上の反目は年と共に長

く傳はりて、百兒士亞、土耳古の對抗となり、シア派は教祖の金條に、新信條を加へ、麻呂末は神の豫言者なれば、アリーは神の宰使なりとし、つねにアリー前麻呂末後の三、哈利發を誹謗し、殊にオマルを以て、重惡の凶徒と罵れば、麻呂末の正教を傳へたり、自稱するソ、ンナ派は、アブ、ベゲル以下の四人を立て、共に豫言者の後繼となせども、就中アリーを以て最劣れりと貶せり、アリーの二子ありて、兄をハッサンと呼び、弟をホセイ、ンといふ、アリーの殂落するや、ダマス、クスの僭主はハッサンの繼立を拒みしに、渠はもごより、空榮幻華に戀々たるの士に非ざれば、從容としてクフ、の宮殿を出で、祖父麻呂末が聖塋の側に退隱せしも、其弟ホセイ、ンの末路に至りては、悲哀、凄慘、百世の後なほ、暗涙を禁ずる能はざるものあり、ホセイ、ンは教祖麻呂末の孫として、ハシム、ムの正嫡



として、哈利發の大統を争ふに足りしかば、一片の密書に十四萬の回々教徒を結び、家眷を伴ひて大漠を巨りイラクの境に至りしに、先の約せし者は偽りの徒にしてクフの奉行先づ背き鐵騎五千ホセインの一行をケルベラの野に圍みぬ。若しホセイにして此圍を斫りて走らばカエザルの力もユスロエスの兵も及ばざる。漠中の一壘にタエの一族一萬の兵を以て之を迎へしならんも、渠は靜に妹フナマを顧み、我は唯天神をこそ仰け、天地の間にもありとある者何れか其元に歸らざらむ、我兄も我父も我母も我には優りしも、見ずや皆我祖父教祖のあこを追ひしぞや。さとし七十二人の從者と共に敵の大勢を切りなびけ、手づから我子と姪とを刺殺し、血潮したる雙手を天に捧げて冥福を祈り、身三十三癩を蒙りて原頭の露と消えぬ。是に於て麻譚末が嫡

統は遂に志を得ず、アリーが後はながく野に下りき。

然りと雖も、幾もなくしてバクダットを南に距ること五十里クフの舊趾を距ること二里にアリー市起り、之を距ること十餘里にホセイ市起り、百兒士亞の諸王はアリーの聖墓を修め、金銅の屋日に映じて光數里の外に耀き、シアの信徒は千里を遠しとせずして來り賽し、尊信おさく、默加默思那の靈域に劣らず、父子三人とホセイの後九世は此派の十二イマムとして尊ばれ、生きて軍兵なく從卒なく財寶なき身の普く民衆の崇敬尊信を受け、時の哈利發に羨望せられ、死してエウフラテスの河畔ホラサンの山間に其墓墳は千年の禮拜を受け、その最後のイマム、マハザはバグダットの洞中にかくれて終るごころを知らざりしより、尙生きて現世に在り、若し天裁の下りて非基督の僭主滅ぶ



時至らばまさに再び世に出づ可しと傳へられ、イスパハンの王  
既には常に二頭の鞍馬を養ひ、一はマハヂの料、他は基督の料に  
といへりこかや。

烏兎勿々として過ぐる百年、二百年、三百年、麻訶末が叔父アブ  
バスの裔は三萬三千の多きに達し、アリーの後もまた多く、回々  
教國の膨大につれて教祖が後胤落裔と稱する輩益多く、賤夫も  
其血統ごしいへば王公の尊敬を受くれば、稍秀でたる者は天使  
ご均しく崇拜せられ、西班牙亞非利加のアルモハドの笏埃及志  
利亞のフナマの冕、モーマンのソルタン、百兒士亞のソフィアの系  
統は皆疑しき神胤聖苗を冒し、上は王公縉紳の尊きより下は商  
工、花兒の賤に至るまで、苟も麻訶末、アリーの後ごしいへばシ  
ク、シエリフ、エミルの尊號を受け、オトマン帝國にては綠頭巾をゆ

るされ公俸を給せられ族長の裁判を受け祖宗の尊榮をほこれ  
り若し夫試に去りて黙加、默思那の靈地を訪はゞこゝには哈利  
發ハッサンが純粹不雜の正統をつける三百餘人の一大家族あり  
て星移り物換る一千二百年の今なほ教祖の殿宇に奉仕し、故國  
主權を握れるを見るなり。

\* \* \* \* \*  
想ふに偉人の出づるや光焰の天より降るに肖たり、天を焦が  
し地を照らし八荒に彌滿する其大光明を認めて蠢々たる幾萬  
千の生靈は争つて蹶起せり、沙漠たる千里の黃砂雲に連り、突兀  
たる雲表の禿峯空を磨するところの地、礫金の熱瘴癘の風に亞  
刺比亞の民が醉生夢死せしもの幾百千年ぞや、一朝默加偉人を  
出し麻訶末人間に呼號するに及び、無量數の亞刺比亞人は勃然



ごとして起り天下を横行し麻訶末既に人間を辭して天に歸りし  
 後も其餘光をほ赫々として遍ねく四方を照らし、サラメン人は  
 遂に青史の上に大帝國を殘し留めぬ。假令出者は没し榮者は枯  
 れ生者は滅し盛者は衰へて已まぬ。現世の波濤は幾度か寄せか  
 へし、月は大漠の砂を照らし風は椰子樹の梢を吹く。幾星霜の夢  
 と過ぎ、堂々たる帝王の偉業空しく征客の歌詠に入るの世とな  
 りゆくも、回々教祖麻訶末の名はアルコランと共に存して滅  
 後一千二百七十年の今なほ二億二千有餘萬の蒼生に仰がれ、イ  
 スラムの教は東大聖釋迦西神子基督の教と鼎立して、アラ一の  
 大光明は長く人世の靈界を照らせり。吁、孤劍を提げて風雲を叱  
 咤せし生前の英雄は滅せる歟、アル、コーランにアラ一の靈光を  
 傳へし滅後の豫言者は生けるなり。豫言者か、神仙か、聖哲か、將た

是稀世の英雄歟、偉なる哉、麻訶末。



# 世界歷史譚

每月一回發行  
 每編著名文學大家執筆  
 每編著名和洋畫伯插畫

定價

全部 二拾四冊  
 壹冊 前金拾參錢  
 六冊 前金七拾錢  
 十二冊 前金壹圓卅錢  
 廿四冊 前金貳圓五錢  
 郵稅 壹冊四錢

洋裝菊版紙數百三十頁



明治三十二年八月十七日印刷  
 明治三十二年八月二十日發行

マホメツト  
 定價 金拾參錢

著作權

所有

著者 坂本健  
 發行者 大橋新太郎  
 印刷者 東京日本橋區本町三丁目八番地  
 印刷所 水谷景長  
 東京本郷區丸山福山町六番地  
 博進社工場  
 東京小石川區久堅町百八番地

發兌元

東京日本橋區  
 本町三丁目

博文館

電話番號(商店用) 本局三〇三番  
 (編輯用) 本局一〇一八番

世界歷史譚第六編

世界歷史譚  
 第六編  
 麻詞末終



譚史歷界世

文學士高山林次郎君著
釋迦 第一編 再版 全壹冊

史學界評：佛教の開祖
釋迦は實に婆羅門に反對して
起れる革新者なり、彼が如何
なる手段により此革新を斷行
し、一宗教を開きしか、換言
すれば彼の事蹟は如何に演ぜ
られしかを少年子弟に知らし
むるは教育上頗る有益なる事
ならん、本書は高山文學士が
彼の嚴めしき考證によらず、
専ら在來の傳説に基き趣味津
々たる此偉人の傳記を編せら
れたる者にして、叙事極めて
簡明に、文章詩趣に富み、且
つ有名なる書家下村觀山の密
書を入しければ、少年學生
に釋迦の眞精神を會得せしむ
るには最も適當の冊子ならん

下村觀山君挿畫

文學士吉國藤吉君著
孔子 第二編 再版 全壹冊

東洋哲學評：春秋戰國の世周
室の勢力衰へ、王綱紐を解き、群雄割
據し大は小を制し、強は弱を併せ大義
名分廢る時に當り、孔子の出世す、
之を孔子とす、孔子の幼時、其經歷
其晩年共に吉國文學士の平易なる筆
で、當り聖人の父より説き出され、先
庭の遊戯を叙し、禮に厚き有様を述べ、
魯國の幸さしての孔子、衛、曹、宋、陳、
蔡、葉、楚を流浪する孔子、魯に歸り
て時、齊禮、易を修め春秋を著作せし
有様及其末路を説けり、終に孔門の七
十七人を擧げ、孔子の徳化後世に及ぶ
所以、其教育法、其文學になせし功績
等を略説せり、東洋の大偉人、世の
大聖人を僅々百三四十頁の内に記述し
畢ぬ、本書少年に讀ましめ其未だ定ま
らざる道義心、流漂する行為を定め、
世の方針を確むるには尤も有益なる冊
子と信す、而も讀むに易き挿画あり、
まで付けあれば如何なる人も概略大聖
人の生涯を知るを得ん、此點に於ては
注意至れり云ふべし。

横山大觀君挿畫

文學士上田 敏君著
耶穌 第三編 再版 全壹冊

史學界評：著者の小序に曰
く「著者は家庭に於て、教育に
於て、又其生平に於て、基督教
徒にあらず、此故に教義に暗
く、性情に通せざる筆路、終
に斯教の精神を逸せむことを
恐る」と又曰く「著者はかくて其
智識の零碎なるを、年少未だ
宗教の幽玄を語るに足らざる
を思ひて、批判を試みず、眞
偽を斷せず、唯に教祖に關す
る傳説を抄記せしのみ」と、然
れども(一)緒論(二)降生及少
壯(三)傳教及迫害(四)受難及
復活を叙するに當り、全編を
通じ確たる史的根據に徴して
筆を執られたれば、善く四界
萬世の師表たりし大天才基督
の事蹟は聖書以外此書により
始めて我國民に紹介せらるべし
を得べき空前の好著なるべし

中村不折君畫

既刊目次

法學士笹川 潔君著
第四編 比斯麥 全壹冊

區々たる普魯斯を以て獨逸の大
強國となし、澳を撃ち佛を
破りて、鐵血宰相の名全歐を
震撼せしめたるビスマルク
公の傳なり、讀み來らば覺え
ず眉昂り神旺するの快感あら
ん、青年諸君必誦の書なり。
國民新聞評：笹川法學
士の著なり、章を分て、學歴、
鐵血政略、國家社會主義、及比
公論となし、小人と大人との
中間を採りて簡明に説述せり
挿画數葉は象堂氏一機軸を試
みたる跡歴然たり。
横濱貿易目新新聞評：笹
川法學士が鐵血宰相の一代經
歴を略叙したるもの行文簡に
して語弊少なく少年清窓の友
として尤も適當なる材料なる
を信す。

小坂象堂君畫

文學士大町芳衛君著
第五編 漢尼拔 全壹冊

日本人評：世界歴史譚
の第五編なり。カルターゴの
興起、第一ブーテル戦争より
説き起して、カルターゴ古英
雄ハンニバルが一生の事業を
叙し且つ其人物に説き及びぬ
雄健なる著者の筆は壯快悽惋
なる事歴に接するに因りて一
層の光彩を添へ、斯の古英雄
の事歴は雄健なる著者の筆に
觸るゝに因りて更に一層の壯
快悽惋を倍加し、一讀卷を掩
ふに忍びざらしむ、少年の讀
本として洵に上乘の著と謂ふ
べし。

渡部審也君畫

文學士坂本 健君著
第六編 麻譚末 全壹冊

續刊目次
第七編 笹川文學士著
漢高祖 北運藏畫
第八編 中村法學士著
俄拔兒 全壹冊
第九編 笹川文學士著
岳飛 全壹冊
第十編 幸田文學士著
歷山王 全壹冊
第十一編 土井文學士著
拿破崙 全壹冊
第十二編 藤井文學士著
沙翁 全壹冊

三



法科大學君著

# 新游泳術

全壹冊 正價金拾貳錢 郵稅四錢

●●●博文館發兌●●●  
 炎暑赫々熾くが如き夏の日は來れり、綠陰沙邊に座して長天大海を睥睨する處、山莊水亭に臥して蟬聲流水を靜聽する處、利益と快樂とを以て、必ずや江湖諸君の好伴侶たらんものは、本館發兌の銷暑書類に如くはなし。請ふ把て身邊に置かれよ。

避暑旅客の好伴侶

- 乙羽生著 千山萬水 全壹冊 正價四拾五錢
- 野崎左文君著 改正漫遊案内 全壹冊 正價四拾錢
- 三宅青軒君著 旅行案内 全壹冊 正價貳拾錢
- 野崎左文君著 日本名勝地誌 全十二冊 郵稅貳拾八錢
- 目次▲1畿内▲2東海▲3東山▲4東山▲5東山▲6山陽▲7北陸▲8山陰▲9海 以上製本既成
- 江見水蔭君著 汽車之友 全壹冊 正價貳拾五錢
- 齋藤綠雨君著 汽車之友 全壹冊 正價貳拾五錢
- 土井晚翠君著 天地有情 全壹冊 正價四拾五錢

法科大學君著

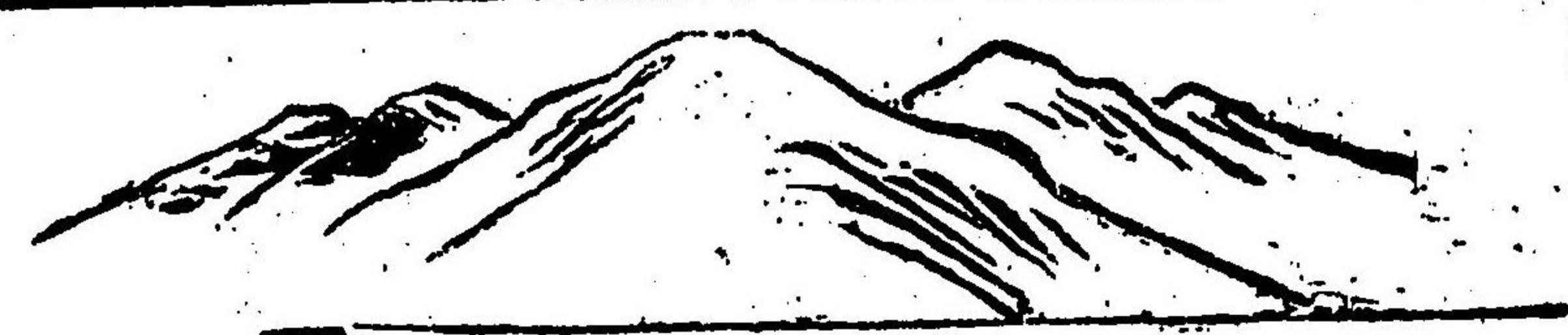
# 端艇

# 競漕

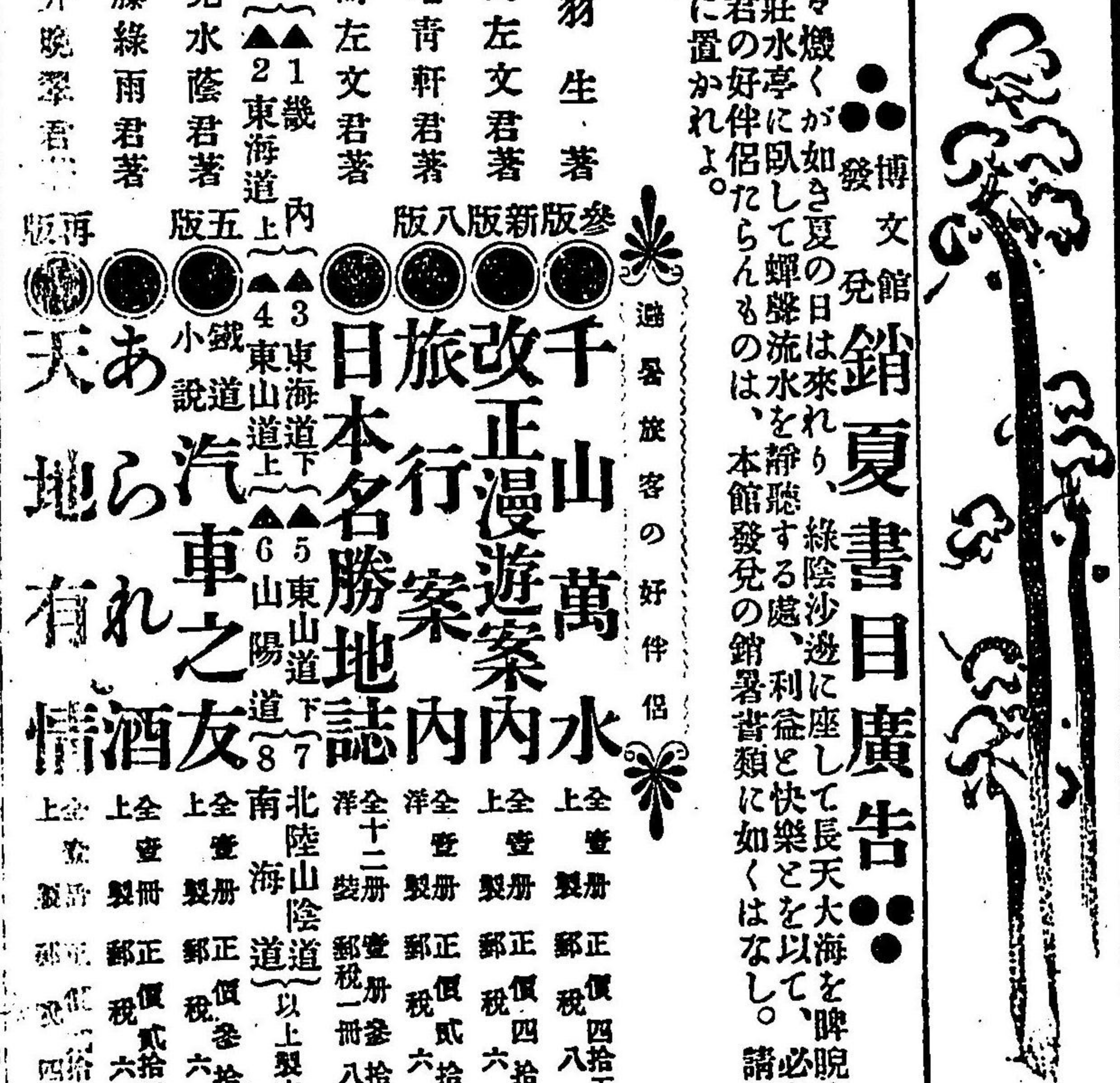
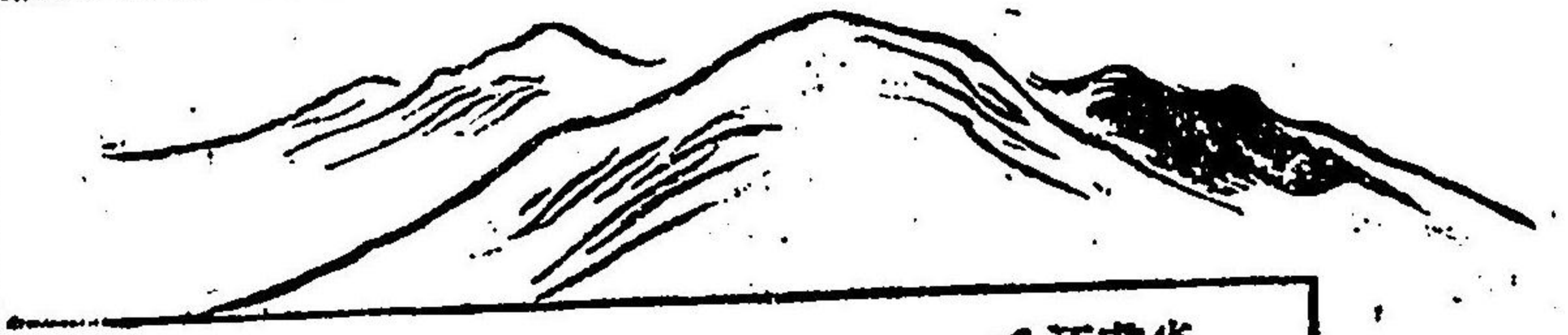
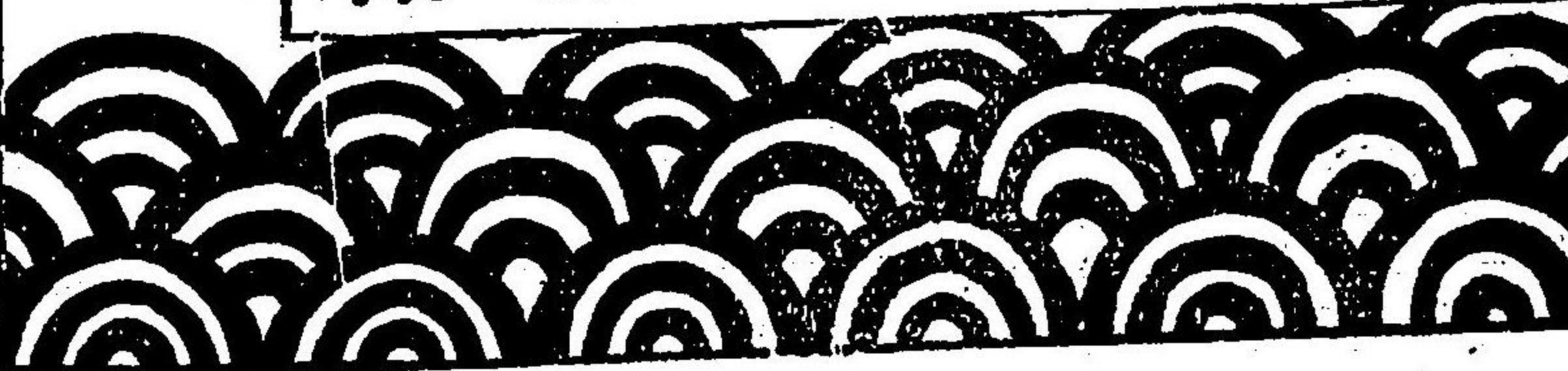
# 漕

全壹冊

正價金拾貳錢 郵稅四錢



- 谷 信次君著 月の光 全壹冊 正價四拾八錢
- 大町桂月君著 黃菊白菊 全壹冊 正價三拾五錢
- 大町、鹽井、武島 散韻文 全壹冊 正價三拾五錢
- 三文學士作 雪花紅葉 全壹冊 正價三拾五錢
- 大和田建樹君著 日本歌謠類聚 全壹冊 正價一冊四拾六錢
- 大和田建樹君著 義太夫百番 全壹冊 正價一冊四拾六錢
- 水谷不倒君著 義曲文粹 全壹冊 正價一冊四拾六錢
- 大和田建樹君編 謠曲文粹 全壹冊 正價一冊四拾六錢
- 佐伯 安君著 遊泳術 全壹冊 正價一冊四拾六錢
- 上村左川君編 內外遊戯法 全壹冊 正價一冊四拾六錢
- 其他小説、稗史、實錄、逸話、紀行、詩歌、俳句、歌謠、遊藝、書類等數百種有之候に付御注文あらんことを希ふ
- 發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館





每月壹回發行 內外遊戲全書

全部拾貳册洋裝袖珍本  
正價壹册金拾貳錢郵稅四錢

法科大學遠山熙君著 (七月二十日既刊)

# 端艇競漕

端艇競漕の我國に行はるゝや實に軌近の事に屬す、近  
に各種の遊技行はれ、漕艇の術も又た其一として隆盛を極むる  
に至る。著者は法科大學にありて、斯技最も敏練なる人、常に  
漕艇術に關する良書なきを歎じ、茲に本書を紹介せらる。行文  
簡明。説明精細、圖書を挿み實況を記し、漕艇の術に於て細大  
洩すことなし。

法科大學稻田實君著 (八月一日既刊)

# 新游泳術

夏季運動として、不虞の用意として游泳術は少年諸君の學ばざ  
るべからざるの技なり。今や暑熱蒸す如く、綠樹影を融たす  
川、若波浪を碎くの海に臨み、躍つて清波に浴するの快を取る、  
亦人間の樂事ならずや。本書は丁寧に此技を説明し、且幾多の  
圖書を挿み、文の足る、一冊を購ひ給へ。

## 續刊目次

工科大學津田素彦君著

● 第三編 ベースボール  
クリツケツト

法科大學三井末彦君著

● 第四編 自轉車  
フートボール

工科大學野田圭園君著

● 第五編 庭球

法科大學遠山熙君著

● 第六編 馬術

著者未定

● 第七編 射的術

發兌元 東京市 博文館

川崎紫山君著

# 近世三十六傑

每月一回發行

## 少年必讀三十六傑出版廣告

徳川幕府の中世以降、英傑の士何ぞ限らん。而も明主賢相より以下、文  
功武勳を以て一世の風雲を叱咤せる傑物三十六人を撰びて、之が傳を  
立て、以て出處進退の顛末を明かにし、以て立志處世の殷鑑たらしめ  
んごす。筆々靈活、懦夫を起し、頑夫を廉にするの慨あるべし、況や明  
治文豪に雄名を博する紫山先生の執筆なれば、如何に其快筆なるかを  
知るべし

第一編 橋本景岳 第二編 島津齊彬  
佐久間象山 第三編 鍋島重高  
横井小楠 第四編 徳川齊昭  
井小楠 第五編 河井

龍馬 第六編 林有子  
東行 第七編 村田清平  
繼之助 第八編 田蓬軒

正價 一册金拾五錢六册前金八拾五錢  
全部十二册前金壹圓六拾錢

(九月上旬第壹編出版)

洋裝美本 全十二册

發兌元 東京市 博文館

東京市 博文館



22K25



# 少年必讀新刊

## 少年讀本

幸田露伴君著 永洗君畫  
 第拾 伊能忠敬 出版八月  
 參編 伊能忠敬 出版八月  
 身商賈に生れて、天賦深く算數の學  
 を好み、國の關門を閉ぢんとす  
 る維新前に際し、感ずる所ありて、海  
 岸測量に心血を凝さ、外人をして其  
 製圖の精敏なるに驚かしめし。伊能  
 忠敬は茲に幸田露伴君が、高山山頭  
 の思想に依りて描出せられ、丸山山頭  
 屹立の銅碑と共に、遺個偉人の面目  
 千歳不磨の義を傳ふべし。

全書冊 正 金拾參錢 郵 稅四錢

## 世界お伽

巖谷連山人著 古洞君畫  
 第七 法螺先生 出版七月  
 編 附 智 惠 娘  
 法螺先生の大法螺には、會  
 呂利新左も三寸の舌を捲き、  
 智惠娘の智惠袋には、三休  
 和尚も圓の頭を掻く、滑稽  
 の大家、頓智の名人、速に一  
 本を購つて、斯道の修業を  
 したまへど申す。

全書冊 正 價金七錢 郵 稅貳錢

## 本日歴史譚

大和田建樹君著 光方君畫  
 第廿 彰義隊 出版七月  
 參編 彰義隊 出版七月  
 維新革命の戰爭、上野に於  
 ける彰義隊の運動は、大和  
 田先生の健腕に依つて猫か  
 れ、劍電彈雨、東台に閃發す  
 るの光景、宛として目に在  
 り、正に是れ少年諸君の好  
 讀本

全書冊 正 價金八錢 郵 稅四錢

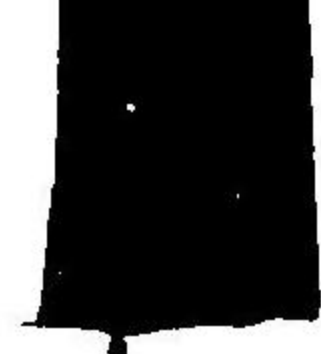
## 山陰麒麟

楠本正隆男題辭 年方君畫  
 福地櫻痴君著 文武堂藏版  
 尼子十勇士の隨一、天  
 正年間の英豪、這個山  
 中鹿之助の逸傳は、茲に  
 櫻痴先生の健腕に依りて  
 躍出せらる事既に雄大  
 文又銳利の讀で骨鳴り  
 血沸くを覺ゆるなり

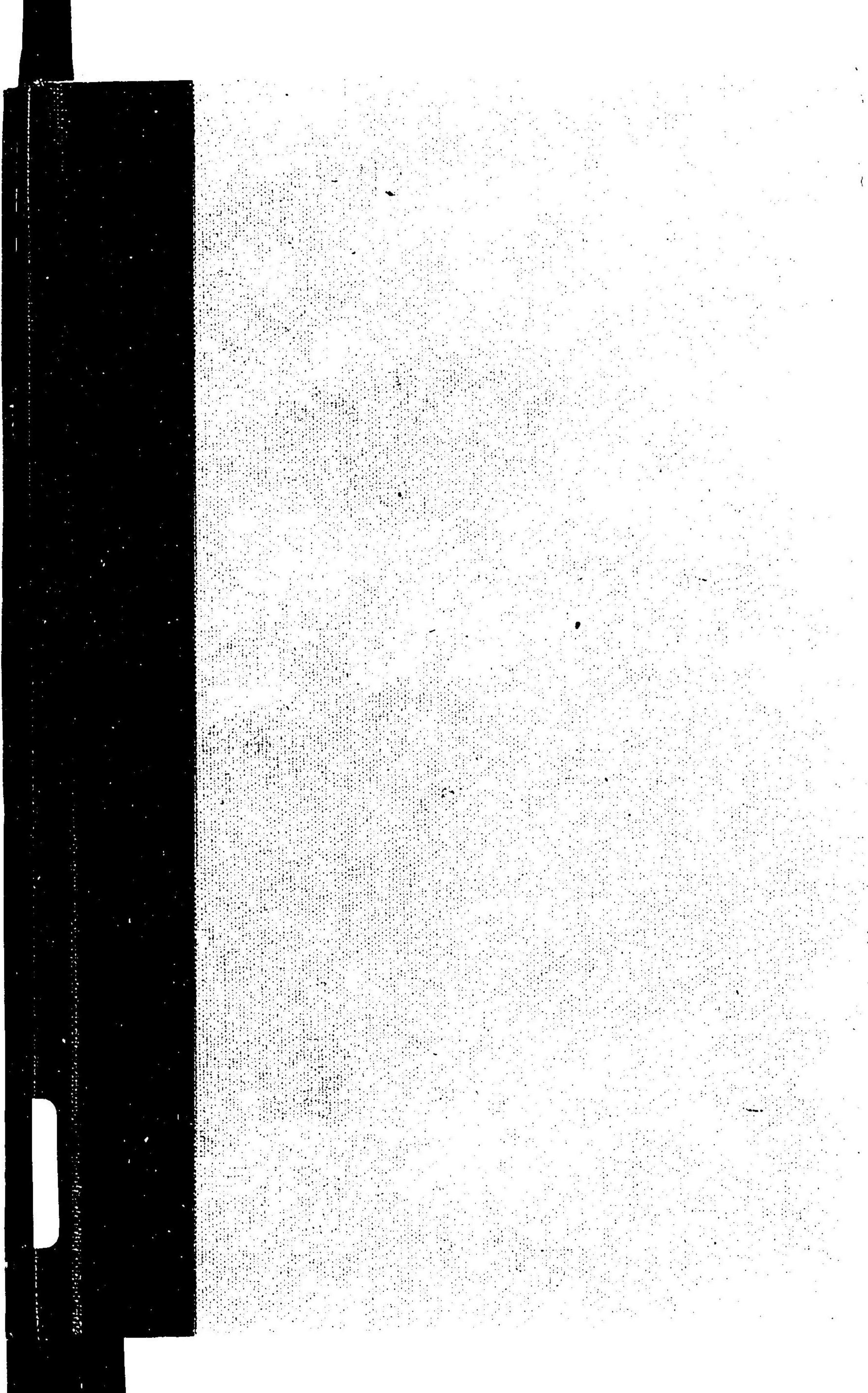
全書冊 正 價廿五錢 郵 稅六錢

發兌元 東京市本區橋目 博文館











84

22<sub>1</sub>

013774-000-7

84-22

麻哥末

坂本 蠡舟(健)/著

M32

ABA-0264





